

Fig. 4,5,6. Aus dem Pantheon in Rom.

Fig. 5.

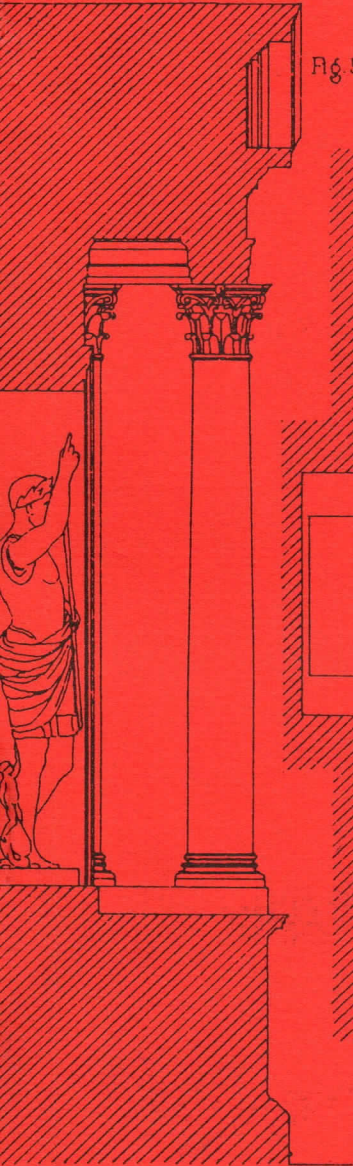


Fig. 6.

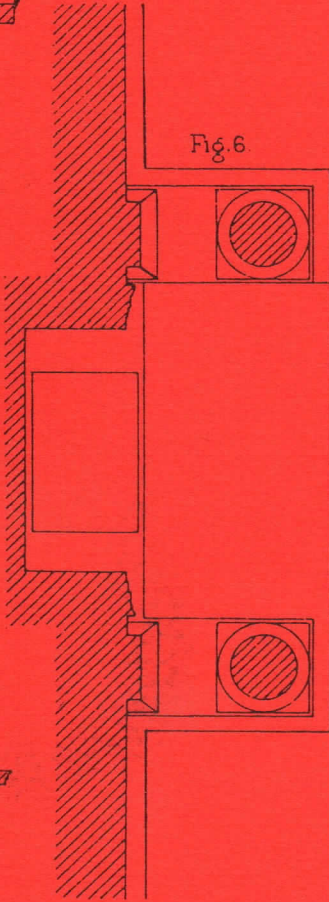


Fig. 4.



龕 NICHE

がん【龕】 ①仏像を納める厨子。②棺(ひつぎ) —広辞苑—

ニッチ【niche】(独Nische)、がん(龕)とも書かれる。壁体内に堀られ、多く平面半円、半円筒状で、上に $\frac{1}{4}$ 半球をいただく凹所、彫像などを置く。—共立・建築辞典—

niche (nich), n. [Fr. niche, from L. nidus, a nest] 1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust, or vase. 2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it. —Webster's New Twentieth Century Dictionary—

ニッチ No.8 目次

- *巻頭言
学園将来計画にあたって<小高鎮夫>……2
- *ごあいさつ
新理事長挨拶<高山英華>……3
- *インタビュー
下元 連先生に聞く……4
- *ライトの作品をめぐって<南迫哲也>……20
- *建築家アントニン・レーモンドについて
 <北澤興一>……24
- *富士吉田セミナー校舎の設計について
 <波多江健郎>……28
- *UIA主催国際学生設計競技
 本学院生チーム受賞作品について
 <小沢 明>……32
- *海外だより
 アロルセン（西ドイツ）の町から
 <田中正美>……38
- アメリカ便り<井川 潤>……40
- ロスアンジェルスからなつかしさをこめて
 <久野和作>……41
- *出版紹介
 都市の明治……44
- *学園の近況
 学園教職員・学生生徒数……45
- 学校別、学科別卒業生数……46
- 学園航空写真……47
- 学園将来計画大綱……48
- 永年勤続表彰者……49
- *建築学科同窓会の近況<小高鎮夫>……49
- *第16年度決算報告……50
- 第17年度予算案……51
- *運営委員名簿……52

学園将来計画にあたって

建築学科同窓会長 小高 鎮夫

昨年10月31日の学園創立94周年記念式典において、学園将来計画委員長の伊藤鄭爾学長より発表された学園将来計画大綱は、都市型を更に越えた“都心型”を基礎に、現在の新宿の校地の再開発をもって、他の学園とは明らかに異なった教育形態を求める学園将来像であった。そして新宿の持つ立地条件は今の日本にとって必要な情報化社会に最も適応した場所であり、本学園は政治、経済、科学、文化を含め今後多くの可能性を秘めた教育の場となり得ると同時に、大学という一つの定められた枠を越えた高等生涯教育を行ない、一般の社会にその場を提供することが今後の日本にとって必要であるというのが、主な主張でありました。

昭和3年に関東大震災による築地の校舎全焼を期に、現在のこの地を校地と定めて以来54年間、東京の発展は次第に都心を西方に移動しつつ戦後の変貌期、特に新宿西口の淀橋浄水場跡がビジネスセンターとして都市の機能の中で重要な役割を持つに至って、本学園の校地は東京都における都心として飛躍的に付加価値の度を高めて来たといえましょう。

今、東京都の23区と武蔵野市及三鷹市の属する区域は、工業等制限法による区域と定められて工場、大学の新設、増設等の制限をしており、そのため法令で定める基準面積以上の教室の増設は禁止されています。そこで都内各大学は、学部等の増設による規模の拡大を計る場合はどうしても郊外に移転することになりますが、そこでこの法律が意図した人口増大の発生が防げたとしても、都市機能の一つである教育の面がおろそかになるとしたら、活力ある、あくなき未知への挑戦を秘めた若きエネルギーが都市より失なわれて行くとしたら、都市の質の低下がそこで新ためて問題となりはしないでしょうか。

一方、学校教育が現在の実社会においてどのような地位にあるかを直視した時に、大学教育が、急激なる変貌を遂げるこの社会に寄与しうる教育、いわゆる高等生涯教育にどう対応するか、都心型

大学を指向する以上この点を特に重要視する必要があると思われます。

私達学園は明治20年に工手学校を設立して以来、工業日本を築くために中堅技術者を育成し、一方の東京帝大工学部出身の指導者と共にその任を果たして来たわけでありますが、その間に多くの工業系の教育機関が生まれて、現在はずでに国が求めた使命も終り、過去における栄光はすでに歴史の中に埋没してしまったといえます。

戦後における日本は、平和産業の中から工業技術において遂に世界のニューリーダーとしての地位を得て来た現在、私達工学院大学の次の使命は一体何でありましょうか。今世界の技術レベルは高度にかつ様々な分野が複雑に入り込み多様化して来ています。かつては国の政策として期待され、発展して来た本学園は、今後は伝統ある歴史と、すばらしい新宿の校地を基礎として、独自の将来ビジョンにより学園の発展を築き上げなければなりません。特に今回の事業は八王子校舎建設と、続いて新宿校地に超高層ビルを建設し、日本の大学教育の新しい方向を求めていこうという高邁な目的をもっています。しかしこの事業を実行にうつすには、社会的ニーズに合ったすぐれた企画力が必要であり、本学園の関係者の一致した協同態勢と本学園以外の様々な関係機関の協力が不可欠でありましょう。今正にそのスタートが始まるうとしています。“力のある人は力を”，金のある人は金を，“知恵のある人は知恵を”出しあうことがこの目的達成に望まれる私達の姿です。

幸にして現在の理事長である高山英華先生は、戦後東京大学に都市計画工学科をつくられた方であり、東京の都市計画には常に関係して来られ、しかも昭和43年に竣工した霞が関ビルの建設計画に参加して以来、幾多の超高層ビルに関与して来られました。又伊藤鄭爾学長は建築史の教授として本学に来られ、高山先生とは先輩、後輩の関係にあります。私達は本学園の重大な岐路にたつこの時期に当たり、二人のすぐれた指導者の元に校友、教職員及び学園内外関係者の一致協力した態勢をもって、このすばらしい事業に邁進していかねばならないと思います。

(註) 学園将来計画大綱は学園近況(48頁)に掲載

新理事長挨拶

工学院大学理事長
東京大学名誉教授 高山 英華

私は、昭和56年4月から理事長になりました高山です。建築学科同窓会は、工手学校の建築、土木の出身者を含め、大学と大学院の卒業生の集まりと聞いております。その歴史は古く、私の存じ上げている諸先輩も数多く含まれていると思います。

私は、東京大学工学部の建築学科を昭和9年に卒業した者で、その後、同学科の助手、助教授、教授を経て、昭和46年まで務め、停年退職後、名誉教授となって今日に及んでいます。その間都市工学科を創設して、都市計画をも専攻しています。工学院大学の前身は築地の工手学校であり、それが専門学校を経て、現在の淀橋の地にうつり、工科大学となり、八王子にも校地や高校を併設しているのが現状です。

設立の当時は、明治の日本の工業界の急速な発展のために、日本の中堅技術者の育成という使命をもって、東京帝大の総長や工学部の教授が自ら身をもって、その設立に当たっています。私の建築の先輩、恩師にあたる辰野金吾先生や内田祥三先生も、その教育や校舎の建設に尽力されたといわれております。

また、新宿の現校舎は、当時は東京の郊外で、淀橋浄水場に面して、西側は正門があったもので、私も少年時代に大久保に住んでおったので、よく遊びにきたところでもあります。その後、新宿の西口一帯は急速な発展をとげ、現在では超高層建築が林立し、各種交通機関が集中して、東京の新都心とも呼ばれるようになってきました。その新宿西口の開発計画には、私も、都市計画、建築の専門家として参画してきましたし、その超高層建築の建設には、直接間接、深く関係したところ です。これらのことを考えると、私が、去年から学園の理事長となって、転換期にある学園の将来計画に関係することになったのは、何かの縁があるのではないかと思います。

いま、時代は急速に転換しております。日本も

工業化社会から情報化社会へと成熟しつつありますし、新宿の様相もさらに発展してゆくでしょう。

また、学園に対する父兄や社会の要望も大きく変化しています。

私も着任以来、いろいろ学園をめぐる状況を調べておりますが、学園将来の発展のためには、今こそ大きく転換をはかり、新しい学園像を確立して、その建設に関係者一同が一致団結して進まねばならないと痛感しています。

学園の将来計画については、すでに昭和56年10月30日の創立記念日に伊藤学長からその大綱案が発表(註)学園将来計画大綱は学園近況(48頁)に掲載され、目下内外の各方面で検討中であります。近くそれを確立して、行動にうつさなければなりません。

それは、新宿の校地と八王子の校地をうまく活用して、八王子の整備計画と新宿の再開発計画を時間的にも、制度的にも、また財政的にも調整のとれた、マスタープログラムを組んで進まねばなりません。そこでは、物、人、金がうまく組織される必要があります。

将来計画では、よく総論賛成、各論反対ということがあります。皆がよく協議して大綱を決定したら、それを団結して強力に推進することが大切です。私もいろいろの計画に参画してきましたが、内部が団結していなければ社会に対して強い力にはなりません。

われわれが考えている都心型大学というのは、新宿という将来に渉る有利な立地条件をフルに活用して、新しい情報化社会に対して、高度の教育、研究機関とともに、都心における生涯教育の新しい型を創造することにあります。それは、日本においても新しい制度を必要とするかも知れませんが、それによって社会に貢献し、併せて学園の経済的基盤確立の一助にしようとするものです。それは新宿に高度の文化性を導入するきっかけになるとも考えられます。

これらの一連の学園将来計画は、建築学科の同窓会とも関連の深いことです。同窓会の団結を計ると同時に、いろいろの面で御援助御協力を願う必要があると思います。

下 元 連 先生に 聞 く

聞く人 小高、南迫、浅見、宮崎、愛川



小高 今日では遠路ご足労賜り有難うございました。25周年記念式典の時、松本与作先生と下元先生が、大学創設功労賞を戴きまして、先に松本先生のインタビューをしましたので、(ニッチNo.7掲載)今回は下元先生に、学生の頃の話、設計建物とか、事務所のスタート時の話、工学院大学建築学科が出来る時の話、或るいは学会での話したとか、その他、諸々の事を含めまして、南迫さんを中心にして伺いたいと思います。

南迫 これは先生が学会雑誌に書かれた「私の受けた建築教育」という文章です。浅見さんがコピーして来てくれました。皆ひと通り目を通しております。保岡先生から木曜会の名簿をいただいたのですが、遠藤新さんとは同級なんですね。私も最近遠藤新さんの研究をしておりまして。

下元 彼は学校を出てアメリカへ渡り、ライトの事務所に勤め、帰って来て帝国ホテルの現場監

督をやっていました。

南迫 それで材料を決める時に下元先生がライトに材料の説明をした。

下元 ええそれはね、大蔵省に材料見本室といえますか、あつて、いろんな材料を集めてありましてね。それをライトがホテルの外装に使う石をどれにしようかという事で見に来たんです。私はライトをそこに案内しました。ライトは、蜂の巣石というのが気に入らしてね。これを使いたいと言っていた。赤っ茶けた石でね。やっぱりあばたのある石でした。確か島根県から出るんですが非常に量が少ないんですね。それでこれを諦めて大谷石にしたんです。

小高 大谷石に決める前も気泡状のものだったんですね。

下元 蜂の巣石と言うのもやはりあばたのある石で火山岩でしょうね。大谷石と似たところがありました。

南迫 大谷石のように軟らかいんですか。

下元 大谷石よりは硬いですね。大谷石は非常に軟かいものですが、蜂の巣石はもっと堅い火山石のような気がしました。大蔵省に小山という理学士が居ましてね。後の理学博士ですが、その方が建築用材の石材を日本全国に涉って調査しまして、石材精義という非常に立派な著書があるんですが、標本として集めて来たものが、たくさんありましたから随分いろんなものが集まりました。

南迫 今でもあるんですか。

下元 今はもうないでしょう。大蔵省にはなかなか貴重なものがありましたかね。時に聞かれるんだけれども、殆皆震災と戦災で無くなっちゃった。例えば製図基本みたいなものがありました。木造が主でしたけれども、ディテールなんか非常にきれいに書いた本がありましてね。それから仕様書なんか、いろいろありまして、標準仕様書

的なものが出来まして、一枚ずつ捲るものもあったんです。例えばコンクリート工事、左官工事、木工事と云うように必要なものを集めてきて、それで一冊にするというものでした。今の建築学会の様な全体の一つになってはいなかった。そういうの今無いかといわれるけれども、今は無いんじゃないかと思います。その前は仕様書は皆、ガリ版で書いてました。仕様係という一つの係があったのです。大体大蔵省という所は専門的でした。設計は設計ばかり、仕様を書く者は仕様書ばかり、積算する者は積算ばかり、現場の監督は監督課というのがあってこれが当る。非常に専門的でしたから、かなり専門的なベテランが居ました。かわりに何でもやる何でも屋は少なかった。

南迫 先生はなんでも屋の方で……

下元 何んにも出来ない屋の方でした。(笑い)

一同 いやそう事ではないでしょう。(笑い)

小高 大蔵省には何年位……

下元 大蔵省には私、32年位居ました。大正3年に入省しまして、昭和20年迄。だから学校を出てからずっと、どこへも動かず。

南迫 最初はどういう部署に入れたのですか。

下元 一番初めはね。私は大正3年に学校を出て、佐野(利器)先生に呼ばれて、『君、大蔵省に行かんか、』と言われたから。『どこへでも参ります。』と返事をして。(当時は請負業界に行く人はあまりいなかったですね。)大蔵省に行くことになりました。大蔵省臨時建築課というのがありました。臨時建築課の前に臨時建築部というのがありました。何のために臨時建築部というのが大蔵省に置かれたかといいますと、専売法を施行して煙草製造工場を作ったんです。相当大きな仕事だったもんですから、その為に妻木(頼黄)さんを部長にして、臨時建築部というのが大蔵省に置かれた。専売事業は勿論大蔵省の所管ですから当時は専売公社じゃなくて専売局と言っていた。数年で第一次計画が一通り終わりました。工場庁舎共主として煉瓦造でした。それが終わったのは明治44年から45年頃でしょう、私の入った頃には臨時建築部は縮小され、妻木さんはもう止められて、臨時建築課になっていたのです。その後専売局の増築や

ら改築もあったし、また新に煙草の工場を方々に建てましたから建築課の仕事は相当ありました。その他に、大蔵省所管の外国貿易関係の施設がありました。その頃の外国貿易港は門司、横浜、神戸、長崎と函館などでした。その岸壁、防波堤、上家税関庁舎等の施設を大蔵省でやっていた。そういう仕事もあったので、臨時建築課に土木もありましてね。門司港横浜新港神戸港長崎港皆建築課になってから竣工したんです。

南迫 するとその頃先生は図面を画かれていたのですか。最初に画かれた建物はどのようなものですか。

下元 私が最初に矢橋さん(矢橋さんはまだ課長ではなく、土木の丹羽鋤彦さんが課長でした)からいつつけられた設計は宇都宮の税務署の木造庁舎でした。学校では木造はあまりやらなかったもので、ずいぶん苦労しました。同じような木造庁舎の図面を参考にしたり、先任の老練な技手さんに教えて貰ったりしてやると図面をまとめました。学校ではこのデザインの提出期限は何月何日と決められるのが例でしたから、矢橋さんに設計を命ぜられた時、いつまでに仕上げればいいのかと質問して、矢橋さんを苦笑させたことを覚えて居ます。あの建物私の処女作はもう60数年も昔になりますから勿論今はないでしょう。それから後ずい分いろいろのものを設計しましたが、やや大きいもので私自身鉛筆を執って、平面、立面、矩計等を画いたものは、前後するかも知れませんが、門司税関庁舎(これは合同庁舎の走りだと思います)。専売局東京工場、品川工場、それから長崎税関庁舎、滝野川の印刷局庁舎、横浜4号上屋、この間、壊しましたが特殊な上屋で船のデッキへ上屋の2階から直接ブリッジで乗り降り出来るようになっていて、客船へ乗る人は皆、これから連絡するようになっていました。それから後大蔵省営繕管財局になってからやったものは、今の総理官邸、人事院ビル、それからこの前壊しました警視庁も私の係りでしたけれども、私は直接手を下したわけではありませんでした。あれは中央諸官衛の1番初めの仕事だったものですから、部長の矢橋さんが熱心に来て、鉛筆でフリーハンドでプランをこしらえてね。

南迫 何とおっしゃる方ですか。

下元 矢橋賢吉といってね。その後大蔵省の建築課が営繕管財局になりまして、その初代工務部長が工学博士矢橋賢吉さんでした。営繕管財局という所は、当時営繕統一ということをやっている、国の営繕は全部そこでやるというのが原則だったんです。但し軍事の秘密に属するという、これは陸海軍省でやるとか、鉄道の駅舎というのはレールと不可分であるから、これは鉄道省でやるとかいうように例外はありました。

南迫 郵政省なんかは別ですか。

下元 郵政省は当時逓信省といっていたが、逓信省の電信電話局というものはやはり、電信電話局と全く不可分であるから、これは逓信省でやる。また郵便局は大蔵省でやるんだが、1等局だけは逓信省に残しておいてくれところいうところでした。逓信省にはそういう陣容がありましてね。なかなか優秀なのがありました。

南迫 吉田鉄郎さんは東京駅前の中央郵便局などやっておりますね。吉田鉄郎さんは後輩ですか。

下元 ええだいぶ後輩になります、惜い人だが、もう亡くなりましたね。

南迫 東京駅、あれは鉄道省が頼んだんですか。辰野金吾さんに。

下元 あれは、営繕管財局は関係しません。設計は辰野さんがやったんです。

南迫 松本与作さんが大部図面を書いたと聞いていますか。

下元 松本さんは辰野さんの所にいましたから。

南迫 この間、東京駅の図面を拝見しましたが、当時の図面というのは立派なものです。

下元 昔の図面というのは、ケントなどの厚い紙に鉛筆で書いて、それを烏口でトレースするんですよ。それを青写真に自分で焼いてましてね。給仕みたいのがいましてね、それが日光で焼いて水洗いをして居ました。

南迫 そうしますと先生が入られてから後に営繕局というのが出来たんですか。

下元 そう。臨時営繕局というのが関東大震災の後、その応急復旧の為に大蔵省に併置されました。然しその外に「国会議事堂建てるべし」と

いう世論が興って。そのため臨時議院建築局というのが大蔵省に置かれてありました。いずれも大蔵省の臨時建築課の技術員が大体兼務してました。皆臨時が付いていたんです。大蔵省の中に臨時建築課、臨時議院建築局、臨時営繕局というこの3つの部署が出来た。そのうち、「国家営繕は統一すべきだ」として、営繕統一という議論が起りましてね、営繕管財局というのが出来て、それに今の3部署が皆吸収されてしまうのです。何んで管財という字を入れたかという、大蔵省に国有財産課というのがあって、国の雑種財産を管理して居ました。各省が持っていて今使っていないもの、例えば土地とか建物はもっているけれども何も使っていない。そういうものを雑種財産といって皆大蔵省の所管になって居ました。そういうものを適当に処分して財源を造り中央諸官衛を建てたい、そのため営繕管財局に国有財産課を加えたのです。中央諸官衛というのは、国会議事堂をはじめ、警視庁、大蔵省、内務省、文部省その他各省、首相官邸もその中に入っていた。営繕管財局の工務部工務課には、係が四つあった。第1というのが、国会議事堂専門にやっていて、第2というのが私が係長をやっている、これは大蔵省、内務省、会計検査院、内閣の建物を、それから第3係というのが逓信省、文部省でしたかな。第4係というのが陸海軍省、農林省、商工省でした。その頃は省も少なかったから、農林商工は農商務省という一つの省だったように思う。私が首相官邸をやったのが38〜9歳でしたかな。首相官邸が済んで、その後外遊したんですから。ちょっと意気盛んな頃でした……。

首相官邸の内部のディテールは、この間亡くなりましたが笹倉梅太郎という中学校出の男がおりまして、これにデザインをさせ、私はほとんどこれにまかせて、少しやり過ぎもあるやに思います。けれども、ライト式をよく捕えていると思います。当時、相当悪口をいうのがいまして、「官邸としては華やか過ぎる」とかね。「ライト式であり過ぎる」とかいう。華やか過ぎるというのが、初め私達が与えられた、その使い方の条件は、官邸であり、つまり、総理大臣の住居であり、お客を呼ぶ所であり、それから政治的公的な仕事場でもあ

る。ですから、迎賓館と住居とオフィスを兼ねた様なものである。右側の広い室などは、舞踏室と名が付いていた。今は会議室となっているでしょう。中2階にグランドピアノが置いてあって、あれは舞踏室だから。迎賓館と考えれば、何も少し派手でもかまわないと思うんですけれども。笹倉君のデザインはなかなか良くやっていると思いますね。ライトの直写してはいないし、しかしライト式ではあるけれども。悪口をいっても、「お前やって見い」といわれたら、あれほど出来る人は少ないだろうと思いますね。

南迫 なかなかあれだけこなれたものは出来ませんですね。先生は矢張りライトがお好きだったんですか。

下元 そうですね。ライトの作品は大抵好きでしたね。特にあの「滝の家」はすばらしいと思います。

南迫 お友達に遠藤新さんがおられたからですか。

下元 それもありますね。遠藤新君てのは、私のクラスの名物男でした。東北の産で、学生の頃は何かという顔と顔を赤くする様な純情な青年でしたが、これがアメリカへ行って帰って来て、すっかり変っちゃったですね。アメリカでは羽織袴で下駄を履いて歩いていたという話だったが、日本へ帰ってきたらね。アメリカの軍隊靴を履きましてね、マントを引っかけて、大きな弁当をこうぶらさげてね（身振りで語られる）。髪をこう長くしてね、髭を生やして、……今なら珍しくないけれど。まるでねえ、当時はあの風体をして歩いているとまるで不逞の輩でしたね。

いや、この不逞の輩がね、実際に東京駅で捕ったことがあるんですよ。遠藤君が長髪で兵隊靴で、マントを引っかけて東京駅のプラットホームにいたらね、知らない人が来て、「ちょ、ちょっと、あの、こちらえ来て、……」と駅長室へ連れて行かれましてね、何んだかんだつまらん話をして、15分位経った、「どうも済みませんでした」と解放されたという。何のことやらわからん。色々考えたら、丁度、宮様がどこかへお発ちになる時刻でね、その時プラットホームに怪し気な恰好をした者がいると、不逞の輩と間違えられちゃっ

て、私服の刑事に引張られちゃって……。

南迫 東京停車場についての批評を、彼書いていますね。辛辣な……。

下元 ああ、そうですね。彼はなかなか辛辣な批評をする男でしたよ。遠慮会釈なくいってましたね。学会で何か学校建築のゼミみたいなことをやって、遠藤（新）君も出ていた。彼は自由学園をやりましたね。ですから学校には自信があるのか、若い人にね。「……これは学校になっていないんだ……」。とかいって、頭ごなしにやりましたよ。いや、彼は豪傑でしたなあ。

南迫 今は息子さんが、みな建築家になられて……。

下元 西村伊作（？）さんの文化学院だか、羽丹もと子の自由学園かを出られたんじゃないですか。遠藤君は帝国ホテルが済んでから満洲に行っていましたね。

南迫 ええ、中銀クラブというのを作っていますね。

下元 満洲でね。ホテル暮しをやっていたんです。そこへ何か建築材料商の人が訪ねて、「お入り」というからドアを開けたら真裸だったというんだ。夏だったから暑かったでしょうが、真裸で出て来たというんです。どうもこっちの方が目のやり処がない。「先生、あの、タオルでも巻いてください」「おお、そうかね」といってタオルをとって腰に巻いて応対したという話がある。私はその材料商から直接その話を聞いたんですが。とにかく彼は変っていましたよ。

南迫 天衣無縫というか。ところで先生の昔書かれた文章で「好きな玄関」という文章がござい

ますね。

下元 ああ、古いんですよ。そんなものご存知ですか。あれは新聞でしたね。

南迫 ええ、あれは時事新報の本ですよ。堀越（三郎）先生なんかの文章も載っていますが、中に先生の文章が載ってまして、「好きな玄関」といって、なかなか中身が面白いですね。その中にも遠藤新さんの話がちょっと出てくるんですね。

下元 そうでしたかねえ。遠藤新君は面白い人でした。割に早く死にまして自分の設計した目白の教会でお葬式をやりましたね。私クラス代表で

弔詞を述べました。遠藤君の設計はあっちこちに残って居りますね。本郷にYMCAの寄宿舎かなにかあります。それから自由学園もそうでしょう。甲子園のホテルがそうでしょう。それから信濃町に犬飼さんの自邸がある。

南迫 それから吉屋信子の家ですとか、谷田部圭吉の家ですとか、最近、ボツボツと見付かってまいりました。今年の夏は真岡という所に大きな小学校の体育館がございまして、それを実測致しました。なかなか構造的にも面白いんですね。

「三枚おろし」とか称しまして、トラスを三つ下屋と上とに架けると音響的にも良い構造的にも良い。安定するという……。

下元 遠藤新君の話で覚えている面白い話ではですね。日本の住宅と外国の住宅との違いは、外国の住宅は窓、出入口でしっかり外界と仕切っている。内は俺の部屋だ。窓から外は外界だ。ところが日本の住宅というのは庭即外界と自分の部屋との間がぼけている。縁側というものが家と庭との中間にあって、自分の純粹の住いから縁側があって庭になる。縁側が中間になる。縁側が内と外とを柔かくぼかして居る。庭の先の塀ではっきりした境いがしてある。これが非常に違うんだと。なる程そういえばそうですね。あのパサディナ辺りの住宅街は非常に気持ち良いのですが、塀も門も何もないですね。道路があってすぐ芝生、そのなかにバラなど花が植えてあって家がある。道路と家との中間に何もないんですね。どこからどこまでがその人の持物であるかわからない。どこでプライベートの空間と仕切ってあるかと云うと、家の入口と窓ではっきり境がついている。日本のはそれがボカしてある。面白い観察だと思ったんですが。

南迫 ライトの初期のと後期のは丁度その変換で、ライトは非常にその日本的なものを学んだんではないかという気がしますね。

下元 ライトは非常に多く日本のものを学んで行ったのかも知れませんが。

南迫 話は変わりますが、工学院を作られた時ですが、いろいろご苦労なさったと思います。その当時のお話を……。

宮崎 先生が工学院大学を設立するに当たって

関わりあいを持つようになったきっかけからお話をお願いします。

下元 私は、大蔵省で一番心にとめてくださった大熊喜邦先生が、「こんど工学院に大学が出来る、最初は短期大学だがお前、行って先生になれ。」そういわれた。昔工手学校は築地にあって私が大蔵省に居た時夜学の製図の先生で行ったことがある。新宿へ引越して来てからも、何度か教えに来たことがある。

余談ですが、当時の新宿という所は汚い所でしてね。青梅街道と甲州街道、どちらも埃りだらけの街道でして、汚穢屋というのが、肥桶を荷馬車いっぱい満載して帰って行くんです。近郊の農家が東京の真ん中に下肥を汲みに来て、それをたんぼの施肥にする。ですから、甲州・青梅街道は埃と馬糞と肥の臭で、新宿はとても汚い所でした。「よくこんな所へ引越して来たな」、と思いました。それが、今あんな所になっちゃって。先輩の先見の明には感服する。そんな訳で、全々工手学校を知らないわけではなかったんです。その時に大熊先生からそういわれて、一応辞退したのです。

私、その頃事務所をやっていたし、第一、大学の先生という柄でもないし、「私にはつとまりそうにもありませんから」とおことわりしたら、「文部省に、もうそう届けを出したので、当分夜学だから、事務所をやっているのも良いではないか。」と。なかなかお許しが出来ない。どうも、大熊先生には頭が上がらん方ですから、「ではお言葉に従います。」というんで、大学の建築科創設に関係を持ったというのはそういういきさつなんです。

最初短大で初めましてねえ。教授が私一人、助教授が正木三省さん、講師が私の少し先輩ですが、宮内技監をやっていた鈴木鎮雄さん。それから早稲田出の須田さんが助教授だか講師だかで居ました。助手に田中某さんがいましたね。それから天野（太郎）さん、樋口（清）さんも助手じゃなかったかな、そんな陣容でした。それで短大が始まって、短大2年でそれが4年制大学になったわけです。〔註大学創立スタッフ天野太郎、下元連、鈴木鎮雄、十代田昭二、平岡正夫、堀越三郎、山崎 弘（旧姓小川）〕。

小高 先生の場合は夜学からではなく短大から

だったんですね。

下元 短大が夜学だった。その前の工手学校は勿論夜学でしたが、その頃から関係があった。

南迫 当時どういったことが大変でしたでしょうか。大学の体をなす迄に……。

下元 第一は工学院大学は全然新規の学校ではなく、工手学校—工学院という古い伝統の上に築かれたものである。例えば古い株につき木した新しい枝である。或は老舗に迎えた跡つぎである。その古いものと新しいものとの調和が大変だと思ったのです。

すぐれた花を咲かせ、うまい実をならせる為には、ばらでも、柿でもつぎ木をする。うまくゆけばすばらしい花が咲き実がみのる。下手にやると台木の性質が出て来てつぎ木の効果が挙らない。工手学校は押しも押されもせぬ老舗である。そののれんは全国に名が響いて居る。そこに新しい養子来る。のれんを守って来た番頭さんと新しい養子とがよほどうまくやらないと養子はえらくなれない。そこが一番難かしいと思った。私は只無我夢中でレールを敷いた。方向だけは過るまいと思って。産むよりは育てる方が遙に難かしい。私が後に続く方々にはお願いしたいのは衆知をあつめ、熟慮して最上の路をたどって戴きたいことです。工学院大学こそ工科としては大学中の大学であるという信念を持って邁進して欲しいと思います。そうすればきっとそうなるでしょう。

次に最初から私が済まなく思って居たのは、大学教授と事務所経営とを兼ねるということでした。どちらにも100パーセントの力は出せない。どちらも中途半ばになるだろうということでした。強いていえば、工学はどこまでも実地を離れては成り立たないものだから、大学の研究にプラスになり、教授上に益になるならば事務所を持つことも必ずしも悪くはないかも知れない。然しそれはどこまでもその範囲であって、利益追求のためであってはならないと思います。一般論として、大学教授は教育と研究に専念すべきもので、事務所で別収入を得ようなどと思うのはよくないと思います。

これが私が初めから大熊先生にお断りした理由の一つでもあったのです。これを考えますと、誠

に自ら恥ながら教授をやってしましまして、それから10数年たって一通りレールが敷かれたと思った時に野口（尚一）先生に申し出た。「もう辞めさせて下さい」、「まだいいじゃないか」というんで随分引張られましてね。毎年3月になると辞表を出していたんですよ。とうとう最後にやっとお許しが出て、辞めさせてもらったんです。辞めさせてもらったんでホッとしたんですよ。

南迫 我々が授業を聞いておりまして、デザインに明るいということが、非常に根拠がありまして、楽しかった記憶があるんです。それも施工ですとか、材料ですとか、大変面白かったんですけども、矢張り実際にやっていらっしゃったからでしょうか。

下元 大学の先生、殊に工科に関する限り、何か矢張り実務に就いたことのある人の方が適任ではないかという気もしているんです。理論物理とかですね、そういう学問の分野は学問だけでいいんです。工科は、現実どうしても拘りがあるものですから、浮世のごみも吸った者の方がいいような気がするんです。

小高 私達、実社会へ出て30年近くなりますが、兎に角、実社会を経験なさってられる方の方がいいのではないかと。うちの学校の性格上かも知れませんが、先生方が外で研究室を持たれているということがいいのかもしれないと考えたりします。今は設計以前の問題も設計者の分野に入ってきています。これらを先生が経験のなかから指導するということ、建築とは人間とのかかわりが非常に大きいので、外に事務所を持っていない、と思います。それは学生と接する機会が少なくなるという心配もあり、いってみれば痛し痒しということですね。

下元 それもそうです。だけれども私はあの時、事務所の方を止めちゃって、大学教授の職に全身を打込んでいれば、これは良かったらと思います。既に半生を実地と人つき合いに費して来たのですから、これが出来なかったのが残念であった。然しそういう自責のある一方、ああ良かったと思う事が一つありまして、それはご存知かとは思いますが。あれはもう20年以上も前のことだったかと思っています。

試験の時に一人の学生がカンニングをやったということがありましてね。そのカンニングは建築科でない助手の方が試験監督していて、見付かり退場を命ぜられて、外へ出て行って、廊下でブラブラしていたが、試験が終って、その助手の方が廊下に出て来た時に殴りかかったという。そういう報告があった。私が主任教授をやっている時で、直ぐ建築科会議を開きましてね。皆さんのご意見を聞いて、私は少し過酷だと思ったんですが、停学6ヶ月という、非常に重罰だと思ったんですが、私はそれを主張し、又賛成も得た。で、停学6ヶ月ということを決めて教授総会に持ち出しました。所が教授総会でも「それは少し酷いじゃないか、別に怪我させたわけではないし、刑事問題になったわけではないし、まあ、殴りかかって一つや二つ殴ったかも知れないが6ヶ月は酷い」という議論もあった。しかし、私は、「これは建築科の教室会議でも決ったことでもあるし、如何なる社会でも、秩序ということが一番大事だと思う」と。世の中に秩序が無くなって、上も下もない、先生も弟子も無いというようなことになっては、社会は納りが付かない。私は世の中では秩序ということを決めたと思うから私自らも重いと思いながらそれを決めたのです。

「どうぞ、この議案を了承してほしい」と話をしました。教授会はそれに賛成してくれて、いよいよ6ヶ月停学の判決が下ったわけである。そうしたら、2～3日たってその学生の親父さんが来ましてね。請負業をやっている、ちょっと鼻っ柱の強そうなお父さんでした。非常に不満そうな面持で、「わずかなことで、別に怪我をさせたわけでもないのに、停学6ヶ月というのはひどい。6ヶ月停学にしたって何も得る所はないではないか、これは少しひどすぎる」と抗議をいつて来た。私はこういったんです。「6ヶ月は少しひどいとは思っている。しかし世の中に秩序というものは一番大事だと思っている。秩序を守って行く為にはかなりの厳罰も必要である。しかし、6ヶ月停学して何かプラスすることがあるかというと、お話の通りプラスすることは何も無い。マイナスである。だからその間を私は只遊ばせて置こうとは思ってはいない。幸い私は事務所をやっ

ていて、事務所の現場があるから、現場見習いとして採用して現場で使い、それだけの俸給は出す。そして学校で教えることの出来ない現場の修業をさせるつもりだ。これは必ずしもマイナスではないと思うがそうすることに御同意が得られまいかといいましたら、その親父さん非常に気持ちよくしましてね、「それなら、ご主旨よくわかりました」といって納得して帰って行きました。

私はすぐ或る現場の主任を呼びまして、「お前の所へ、こういう学生を付ける。これこれの学生だ。少し乱暴な所があるかも知れんけれどもよく教育してやってくれ。今の所6ヶ月の期間だが、その間に出来るだけのことを面倒見てやってくれ」と頼んでやった。

処がその現場主任、少々意地の悪い男で、親切に教えてくれたかどうかわからん。わからんが、その乱暴だった学生が、非常に真面目に朝からちゃんと来て、一日も欠かさず現場をやっている。その少し意地の悪い主任さんの所で、ごたごたも起こさず、非常にしっかりやっているんです。私も1～2回行って見ましてね。良かったと思いました。3～4ヶ月目に、教室会議を開いて、停学6ヶ月を4ヶ月に低減してほしいと提言しましたら、これ又皆賛成して下さいまして、これを教授会に持ち出しまして「停学6ヶ月の決定で目下停学中だが、この様なわけで非常によくなっている。もう刑罰の目的は充分達したと思うから、6ヶ月停学を4ヶ月に軽減したいと思う。ご賛成を得たい。」と提案しました。ところが、これ又反対する人がいましてね。「一辺決めたものを、おかしいじゃないか」と。「おかしくてもおかしくなくても、非常に本人は良くなっているんだし、これ以上学業復帰を遅らせても何の意味もないから……」といったら、賛成してくれる先生も多くって、結局停学6ヶ月を4ヶ月に軽減して、直ぐにも明日からでも学校に来てよらしいということになった。それはそれまでなのですが、それから先が感心したのです。その男の住居は多摩川の上流ですが、川の縁でその附近にうまい梨が出来るんですよ。何処ですか、登戸よりもっと下でしょう。非常にうまい梨が出来るんです。それを秋になると必ず籠に一杯入れましてね、重いやつを下げて

私の品川の家へ来る、秋になると毎年ですよ。10年近くですね、持ってきてくれたんですよ。私は居たり居なかったり、居なかった方が多かったのです。その学生としみじみ話をする機会もなかったけれども、本当に私は感心したんですよ。何も梨がうれしかったのではない。良く私の考えていることを理解して真面目にやって、ここまでその粗暴な性質が直ったかと思うと非常に嬉しかった。私が学校に17〜18年いましたかな。その間で、前にもいいましたように教授として誠にどうもお粗末であったにも拘らず、今のことだけは、これは只一つ私の心を慰めてくれる出来事だと今でも思っているんですがね。

南迫 大変いいお話ですね。

下元 あの学生の親父さんが請負でしたから、彼も請負業を継いでいるでしょう。恐らく立派な請負人になっていると思うんですが、これだけは大学にいて、まあまあ良かったなあと思う一つのことなんです。

南迫 これが同窓会誌に載ったら、思い当たる方がいるでしょう。こういった事が本当の教育かもしれないですね。

下元 この男は立派な男になっていると思う。ところがね、これと全く反対の話があるんだ。(笑い)

小高 これは困った話ですね。

下元 これはねえ。私が今でも悔んでいることがあります。これは学校には関係ないことですが、大蔵省にいる頃ですよ。私がまだ少壮技師で係長をやっていた頃のことでしたが、若かったからそういう失敗をしたんだと思うんですがね。

中等学校を出た、多分工手学校か工科学校かそういう所を出た男が大蔵省へ入って来たんですよ。大蔵省は割合成績の良いのを採用してるので成績は良かったんだと思うけれども、歳は20を越していたんでしょう。それが入って来ましてね、経歴を見ますと大工をやっていたんです。大工をやって、夜学へ通って、これを卒業したんだね。で大蔵省へ入った、とこういう人なんだが。

大工の経験があれば、これは下手に製図場に入れてトレースばかりやらせているよりは、木造の現場へ付けた方がもっと有効だろうと思って、小

さな木造の現場へ配属させたんです。恐らくその男一人位しか付いていない現場でしたから、木造で小さなものではあるし、それから、工期もそんなに長くないし、大工はわかっておるし、丁度良いだろうと思って付けたんですよ。ところが、暫くしたら妙な噂が私の耳に入ってきた。その男をAとします。それから片方の請負をやっている会社をBとしますね。「あのAはこの現場が終わったら、B会社に雇ってもらおう約束が出来ているようだ」というのです。

自分が今監督しているその工事の請負人、その請負人の所へ「これが済んだら、お前の所へ採ってくれ」、「ああ、結構です。私の所へ是非来て下さい。」といった約束が出来ているとすれば、これはすてて置けないと私は思った。

役所関係というのは非常に厳密でしてね。特に大蔵省はそうでした。請負人の所へ行行って、お茶一杯ご馳走になってもいかん、といった教育を受けたんですから。

将来採ってもらおうとしたら、厳正な工事監督は出来ないだろう。間違っても見て見ぬ振りをするか、黙認するか、その位のことはやるんじゃないかと私は考えた。そこでその男を呼びましてね。「こういう話があるがどうか」と聞いたんです。そうしたら、「そうです」というんです。「どうしてそんなことをするのか」と聞いたら、「私は今迄楽だったから妻帯している。大工の給料と大蔵省の学校新卒の給料は半分違う。大工の給料なら食って行けるが、大蔵省の新卒の給料ではとても食って行けない。だからこの仕事がすんだら、あの請負人の処にもう少しいい給料で採って貰うつもりです」「それは少し間違っている。君は技能者として大工は一人前であろう。だから大工一人前の給料をもらっているのは結構だ。しかし、技術者として新しく再出発するつもりで学校を卒業して来ただろう。技術者でおれば目下非常に給料が少なくとも、だんだん給料が上って行って、地位も上って大工よりは良くなるはずだ。だからここ暫く何んとか生活を切り詰めて辛抱出来ないか、よく考えてみてくれ。」といって帰したんです。

そうしたら2〜3日してきて、「矢張り辞めさせてもらいます」というのです。私は恐らく共稼

ぎするなり何とかして、兎に角ここ2〜3年辛抱していれば絶対良くなるのだから何とか考え直さだろうと思っていた。然し彼はやっぱり辞めたいという。どうもそれではしょうがないですね。それで私も、上司にその辞表を取り次いだ。恐らくその男は、B会社が採用してくれるものと思ったでしょう。だけどB会社もそうなると、採用するわけがないですね。役人を誘惑して「……あとはおれの会社で採ってやるから……」と云うような約束して、監督をいくらかでも甘くしてもらおうなんていう考えだとすれば、これは将来役所の指名にも外れるかもしれないし。だから案の定、会社は採ってくれない。その男弱っちゃって途方に暮れちゃったんだねえ、それから何ヶ月か後にみすぼらしい格好をして私の家にやってきて「あの会社も雇ってくれないから、私南京豆の行商をしています」。「そうか、それは君、気の毒だけれども会社が雇ってくれないのは当たり前だと思う。しかし、南京豆を売ってなくとも、君、大工をやっておればよいではないか。元の大工にかえれば食えるじゃないか」といったら「大工道具は全部売ってしまいました。あれを買い集めるのは大変なお金で、とても出来ません」「そうかなあ、困ったなあ、しょうがないから国へでも帰って親類と相談して見たらどうか」と、国の新潟へ帰る旅費の足しにでもしてくれと多少の金を包みましてね、「再出発する外はないねえ……」と、そういつて別れた。それから又正月過ぎて、ひょこっとやって来て、今度はもっとひどい格好をしていて、全くルンペンみたいな格好で、気力も何も失ったようなみすぼらしい、何をしているかわからない。ただ私の家の台所口に黙って立っている、あれは弱っちゃったですね。家の女の子なんか気味悪がっちゃって困ったね、これは、それでそれっきりなんだ、後は全々わからない。

私はね、私の一言のためにあの若者の一生を狂わしたのではないかと今でも自責の念がありますがねえ。今なら私はそういいませんね。その時は若い時で純情だったから、いきなり「お前、こうだからどうか」といったんですが、恐らくその時謝ってくると思っていたんですね。だからそういったんですよ。それが今の様な話になっちゃった。

現在なら、まあ、私はその男を呼ばないで、むしろその請負人を呼びましてね、当たり障りなくね、「どうもあの男は大工で木造は良くわかってるんだが、しかしどうもあまり役所向きではないから、お前の所で追い使いにでも採ってくれんか」と。恐らく請負人、採ってくれたかも知れんと私は思うんですよ。役所から頼み、「役所向きじゃない。むしろ業者向きだから、役所よりは少し俸給を良くして採ってやれんか」とそう今なら頼むでしょう。何分、その時は若くて、まだ世の中の酸いも甘いもあまり知らなかった。だから今思うと可愛そうなことをしたと思うんですよ。どうなったろうかと……。

小高 先程の学生の例とまるっきり反対に出てしまって……。本人は全く同じことをいっていると思うんですが。

下元 本人にもよるでしょうね。本人の気構えにもよるでしょうけれども、あれは気の毒なことをしたと思いますよ。まあ年を取るといろんな経験があつてねえ。

小高 私のところにも若いのが付くのですが、先ず字を見ましてね、字がきちっと書いてあるかどうか、兎に角建築屋さんは人に見せる字なんだから、その辺を良くいうのですが。字がきちっと見やすくなって人にアピールする様になると、だんだんシャッキリするようですね。だらしない字を書いている人は何か全部がだらしないようですね。変な話ですけれども教育が字から始まるわけです。

そうしますと、あと工学院大学の建築学科を作られるに当たりまして先生方、先程まで正木先生その他、先生もあちこち先生を選ぶのに苦労なさったというか、人選なさったというか……。

下元 学長は野口（尚一）先生でしたけれども、野口先生は機械出ですから、あまり建築のことはご存知ないでしょうから、大熊（喜邦）先生が工学院の理事をしておられた。営繕管財局の部長で、国会議事堂の竣工式の時まで大熊さんが指揮をされたですね。あの議院が出来てから辞められたんですが、野口先生はだから恐らく大熊さんを片腕にして、大熊さんと相談していろいろな事をやられたんじゃないかと思います。

小高 その中に先生も入っておられたという…。

下元 ええ、私もたまさか、相談を受けるくらいなものでして。

南迫 相曽先生なんかもそうしますと、議事堂の彫刻などをやられて……。

下元 相曽先生を引張ってきたのは私なんです。彼は議院の模型をみなこしらえた人でね。彫刻家として銅像や仏像など、沢山の作品があります。三味線が上手で、飲むと愉快な人でした。それから堀越（三郎）さん、保岡（豊）さん、吉田（辰夫）さん、それに橋本正五さん。この人達は皆私が引張ってきたんです。

保岡さんは固い真面目な人でね、あんな四角四面な固い方はないんです。随分変り種で、大蔵省にいましてそれから会計検査院の検査官になったですね。大蔵省の技術官と限らず、技術畑の人が会計検査院の第2局長かなんかになるというような経歴の人はほとんどないでしょう。非常に真面目な人で、第2局長として鉄道省を受持っていたんです。

会計検査院というのは金の使い途の拙いのを皆、指摘するところですが、びしびしやったでしょうね。それでのちに保岡さんの持場が鉄道省から大蔵省に変わったんですよ。その時、鉄道省が赤飯を炊いて喜んだという話を聞いていますんで、それを保岡さんに話したら「そんなことないでしょう、それはデマでしょう……。」とっておられた。それくらい真面目なんですよ。

保岡さんが会計検査院を辞められたとき私の所にこられまして「どこか請負人に行きたいのですが……。」「あんた、請負人には向かないよ。請負人というのは少々悪いことをしてでも儲けなければしょうがないんだから、それはあんたは向かない」、「そうですかねえ……。」とかいって、自分のことはあんまりわからんとみえて、「そうですかねえ……。」というんです。だから「あんた、工学院で先生が欲しいそうだから工学院に行きなさい」、「はあ、それではそういたします」といって、先生になったのがその時なんです。非常に真面目な先生でね、あんな奇特な人はないですよ。大蔵省で私と一緒に、私の後輩だっただけのことなん

ですが、毎年暮になりますと、一升瓶提げて事務所に年末の挨拶にくるんです。正月になると又、正月の挨拶にくる。これこそ10年、20年変わったことがないのです。

ああいう真面目な人は少なくなったですね。

南迫 平岡先生はどなたのご紹介でしょうか。

下元 いい先生でしたが亡くなりましたね。紹介は誰でしょうかねえ……。

小高 工学院大学は東大系と早稲田系に大きく分かれていますね。早稲田系は平岡先生、波多江先生それに天野先生もそうですね。天野先生もいろいろな印象がありますし、下元先生には施工を教えていただきました。相曽先生も非常にいい先生ですね。私がこう盛んに手で粘土をいじっていたら「女性をいじるような形だね、これは……」などと冷やかしたりなさって……。

南迫 鈴木鎮雄先生もなかなかこうおとなしくて、綿密に仕口を黒板に書いて下さいまして、一般構造を緻密に教えて頂いたんですよ。

下元 鈴木さんは宮内庁技監でした。私の二年先輩ですよ。あの方はほんとうの立派な紳士でした。

南迫 関東大震災の時、向うが燃えている。自分のいる建物に銅板が貼ってあって、中が炭化し始めているのがわからなかった。ところが、ボーッと陽炎みたいに見えて、「おお、これは大変だ」ということに気が付いたというんですね。銅板貼りというのは何か……。

下元 あのね、昔は銅板貼が随分あったからね、外から見て何んでもないんですが内の木材が燃えだすんですね。あの火事という時の熱というのは大変なもので、火の粉が飛んできたりなんかしなくとも、輻射熱で燃え出す。例えば道路が相当広く、あちら側が燃えて居るとしましょう。こちら側に電柱が立って居る。火の粉が飛んで来るのでもないのにこちらの電柱がちょろちょろ燃え出すんですよ。これは熱の輻射熱ですね。空気が或る温度以上になると発火性のガスが出てくるんです。木材から。それに火がついて、じりじりじりじり焼けて行くんです。私があの震災の時にそうでした。家具だのふとんだの庭に引張り出しましてね。割合に庭が広がったものです

から、庭に引き出したんですが、燃えちゃうでしょう。とね、火の粉が飛んでくるわけでも何んでもないんですのに、3m、5m、もっと離して置いてあったやつが、ポロポロ、ポロポロ燃えて行くんですよ、銅板で包んだ木材が燃えるのも同じ理屈ですね。

この間、建築士会から大震災の時の思い出話を書いてくれていうんで……、その時も被服廠という所へ随分多くの人が逃げたんですよ。それが今の輻射熱もありましょし、一酸化炭素も出るんですな、大火の時は。一酸化炭素と炭酸ガスの混じった熱風がワーッとくると、それでやられちゃうんですね。被服廠でねえ、凡そ40,000人という人が死んだでしょう。助かった人は人の屍骸の下に潜り込んでいた者です。上の死んだ人が蒲団になって熱を遮り、ガスも遮ってくれたんでしょうね。その人は助かって今も健在ですよ。

南迫 ほう、そういう話があるんですか。

下元 いろんな話がありますよ。東京で、あれは震度7といっているんですけども、あの位の地震があったらどうなりますかねえ。あの頃みたいに東京が焼野原になることは無いと思うがねえ。不燃建築がかなり建ってきましたからねえ。このビルなんかはどうですかねえ。下は通れなくなるんじゃないですかねえ。あの時でも、丸ビルの上の方、9階でしょう。地震が揺れたらね、立っておれなかったそうですね。床にしゃがみ込むか、座り込むかしなければね、立っておれないんですって。相当揺れたんですね。

小高 ですから、人間が飛んで行くか、机が飛んで行くか、什器が飛んで行くんだと思うんですよ。それが硝子にぶつかる。「これは恐いな」と思うんですね。今、おっしゃったように立ってられないということは、滑り出したら止まりませんからねえ。

下元 いやあ、相当恐いと思うなあ。第一消防活動がどうでしょう。上の方までとどく梯子もなさそうだし、下の方で火が燃えたら上の方の人はどうするか……。

小高 先生、話は変わりますが、私達が先生に習ったのは施工なんです、今迄伺ったお話にはあまり施工に関するお話がございせんが、ど

の様なことで施工の方をなさったのですか。何か学会の主査など随分なさっておられた……。

下元 学会では材料施工関係の委員や、委員長を10数年やりました。大学で施工材料を受持つのも少しおかしかったんですが、まあ大蔵省で実務に当たっていましたからねえ。現場の施工法はまあ、相当見てもいるし勉強もしたつもりです。工学院へ来ましたらね、皆こう割当てみたいになっちゃって、「お前は何やるんだ。お前は何やるんだ」というようなことで、私は施工材料。そんな割り当て誰が決めたか知らんが、何となくそんなことになっちゃった。私としてはむしろ計画の方をやりたかったんだけど。

小高 それは初耳ですねえ。まあ、設計のことは色々伺いしていたんですけども。

下元 まあ、設計の係りにいましたからねえ。大蔵省の現場の係員で、監督課というのがありまして、このほうは現場ばかりやっていました。施工の事はかなりくわしいエキスパートが居たんですよ。

南迫 この前、25周年史にも書いたんですけども、私共、製図の時間に、下元先生、堀越（三郎）先生全部そろって製図室へこられたんですよ、一番最初の時に。あれは一体、どういうわけだったんだろうという文章を書いたんですよ。下元先生はその方がご専門だから興味があっておいでになったんでしょうかねえ。

下元 ええ、僕は製図には特に興味があった。然し、製図は皆の先生が見ることになって居ました。

宮崎 私共が学生の時、第一回目の製図は製図室でやりましたね、今の学生は製図室ではやらない様ですが。先ず文字、次にオーダーのコピーでした。建築に進んで先ず学んだのがこれらでした。

南迫 烏口をいかに研ぐとか、普通高校から入って困りましたよ。

下元 昔、大蔵省あたりでは、工手学校あたりを出た人は、3年位はトレースばかりやる、それですっかり設計を覚えてしまう。

小高 工手学校を出た方々の活躍についてご存知のことがありましたら。

下元 昔の工手学校というのは相当勉強し、相

当偉かったと思いますよ。ずっと昔は工学に関する学校は東大と工手学校だけでした。大学を出た技術者だけでは日本の工業は動かない。これを助けその手となり足となる中級技術者が居なければならぬというので、東大の教授連即、当時の技術のトップに居た人々の発起で工手学校を創設し、その教授連が講義に出て居たことは御承知の通りです。だから生徒の方も一生懸命に勉強した。日本全体として技術者が不足の時代でしたから、民間の製造会社、建設会社では工手学校出の人々が実際の仕事をし、その人々が次第に実権を握るようになったのです。建築界で見れば、清水組、大倉組、大林組など、いつて居た建設会社の重役は殆皆工手学校出の人々でした。私が学校を出た大正3年頃でも同級生は僅に15人であった。京都其の他の国立大学と早稲田等の私立大学の卒業生を皆集めてもやっと50か60人であったと思います。だからその以前には建設会社にまで人が廻らなかつたのです。

南迫 造家学科というのはどういう……。

下元 それは随分昔のことで、これは工部大学時代で造家学科といていた。工部大学というのは、帝国大学の前にあって、工部大学造家学科というのは、東京帝国大学建築学科の前身です。その頃の卒業生というのは、片山東熊さん、曾彌達蔵さん、辰野金吾さん、その次が渡辺譲さんです。それが後に建築学科になったのです。

造家学科の第1回卒業生が4人、第2回が2人でした。私が建築学科の34回卒業ですが同級生15人、6回、7回、8回は1人ずつです。

南迫 先生、私の研究室だけで30人ですよ。

小高 全国に近づいているんですね、大したものですね。

下元 だから建築屋が多くなって困るんだろうに……。

小高 教えた卒業生がすぐライバルになってくるんですからね、これは大変ですよ。話は一寸飛躍するのですが、今学校が移転問題とか、将来に向ってどうこうとありましてね、一時は東工試（東京工業試験所）という直ぐ近くに行くという話があって、今度は現在の地に留まるということになって生涯教育という。生涯教育とは、伊藤

（鄭爾）学長の言葉を借りますと、「所謂、工學院大学の建学の精神に則り、大学卒業生が非常に多いので、その後の人達の教育を兼ねながら、地域的な社会に貢献する。……」ということらしいんですけども、その辺は先生のお考えは如何でしょうか。

下元 今の学長はそう考えておられる様ですね。都心型大学というのでしょうか。私は反対ですな。私は思い切って移転すべきであると思います。先輩がね、あの馬糞街道に校舎を移していったことは、非常に先見の明があったことだと思って、これをねえ善用すべきだと思います。新宿の土地はねえ坪1千万円以上するでしょう。そうするとあの土地は300億円になるんですよ。300億あればねえ、広大な土地へ引越して、借金を全部返しちゃって、それで授業料半分にしたって充分経営して行ける様な気がする。学校の先生なんかノーベル賞級の学者を集め、俸給を倍出してもよいから、田舎へ来て日本の一番立派な大学となれば、どんな田舎だって通用するんですよ。ドイツがそうなんですね。ドイツの大学なんていうのはね、ベルリン大学なんていってもえらいとは思って居ない。むしろミュンヘン大学とか、なんとか大学の方が「俺の方が偉いんだ」と思っている。地方大学の教授に「ベルリン大学へ行ってもらいたい」なんていうと鼻であしらう。その位のプライドのある大学になりゃ、何も東京にいなくたっていいと思うんですがね。どうも、学長の都心型大学というのを詳しく聞いて見ませんからわかりませんが、どういう意味かなあ。

南迫 実はあれを売りますと、規制があって高く売れないというんですね。

下元 規制法があるといっても私有地ですからそうひどいことは出来ないでしょう、それにあそこは地下鉄のターミナルになるというのがありますね。これはやり方一つだと思んですが。あそこはほとんど教育の場ではないという気がするんですがねえ。

南迫 まあそういう声も学内に随分ありましてね。

下元 どうしようもないでしょう、あれは。設備を増やすといっても、実験設備の置ける場所も

こへ来て研究する。生徒も水曜日の午前何時に出
てこい。そこで実物を見せて教育する。探検隊を
何隊か組んで世界各国へ出している。それが採っ
て来た資料を皆、こへ持って来ている。或るい
はそれを映画にする映写室がありまして、社会教
育ということに非常につくしてますね。アメリカ
ンミュージアムとドイツスミゼウムとは非常に
重視したもの1つなんです。シカゴにも大き
な博物館があるんです。

愛川 それで先生、収蔵庫は各博物館、どうい
った作りになっていましたか。

下元 収蔵庫、これは各博物館は普通の人の見
る所ではないですから、皆館長にことわりまして
ね。各館見せてもらったんですが、所によっちゃ
あ、陳列室位の広さを持っている所もありますね。
標本作りや修理はそれの専門家がいてね、日本
でもありますよ。竹橋の国立近代美術館、あの
地下の修理工場と収納庫。あれは私の所で一昨年
やりました。内部はコンクリートで不燃でして、
修理、荷解きをしなければならない。なかなか博
物館では重要な要素ですよ。

愛川 私、今、栃木県立博物館の収蔵庫の仕事
をさせてもらっているんですが、一般的には外国
の収蔵庫材は何んでしょうか。

下元 煉瓦か石又はコンクリート造内装はいろ
いろありました。

愛川 国内の美術館、博物館の収蔵庫ですと、
杉檜、スプルスを内張りして、調湿するという条件
が出てきてまして、私共内装工事をするんです。

下元 日本は湿気が多いので、ヨーロッパとは
気候条件が違いますから、夏湿気が多くて結露の
問題があります。それと博物館の種にもよります
ね。

愛川 それで私も先生の教えを頂戴しまして、
ベニヤというものを作りました。普通ですとホル
マリン合板ですが、博物館の中では一般にはホル
マリンを保存材料として使いますけれども、とこ
ろが、国宝、重文といった物になりますと環境が
全く違ってしまいうわけですね。普通、お寺など
にあるものはホルマリンという環境には無いわけ
ですが、それを収蔵庫に持って来た時に一辺にホル
マリンの中に入ってしまう。これはまずいと、で、

ホルマリンの入ってない合板を作りました。とこ
ろが、これが国立能楽堂収蔵庫に入りまして、国
立博物館資料部棟収蔵庫に考えて頂けるというこ
とになりまして、関東地建でやっている工事なん
ですが、日本ではベニヤを使わない建築物は無い
ので、何とか日の目を見そうな形勢にあるんで
すよ。

下元 そうですか、それは良かったですね。

南迫 ああ、すごい印が押してありますよ。こ
の本（下元先生が持参された高等建築学）は岸田
日出刀先生が持っていたんですよ。すごい本だ。

下元 ええっ、岸田日出刀君が、ああっ、本当
だ。岸田日出刀君が持っていたのか。

南迫 先生はご兄弟は何人いらっしゃったん
ですか。

下元 姉が一人。これは死にましてね。兄弟は
いないし、先輩は一人いるきり、大学の先輩で山
下寿郎さん。あと今年になって戸田利兵衛さんが
死んで、竹腰健造さんが亡くなった。友人もだん
だん少なくなります。「生き残る淋しさもあり老
の春」という俳句を新聞で見ましたがその通り。

南迫 先生は本当にいつも健康ですね、何か秘
訣みたいなものがありますか。

下元 そういうことを良く聞かれてね、困るん
ですがね。何んと答えて良いやら、どうも怠け者
でしてね、何も健康法らしいことをやらないん
ですよ。何もやらない方がかえって良いのかも知れ
ない。

南迫 私なんか直ぐ太ってしまうんですよ。

下元 あまり太らない方がいいですよ。食
事は何もコントロールしていない。食い過ぎは年
寄りはいかんようすな。この間、中国へ行った
時にどうも、朝から晩迄支那料理を食わされちゃ
かなわんと思っていたら、まあ、それほどの事
もなくて済んでしまった。オールドバーというの
があるでしょう、お酒に。あのトーマス・パー
てのが152歳で死んだのですがね。それは長生き
したというんで、英国の王様に招待され、ロンド
ンでご馳走になって、死んじゃったですなあ。食
いつけないものを食ったせいでしょう。150何歳
というのは立派ですね。私はこの12月で93歳にな
りますがね。だから来年になると94ということで、

どうやら95～6位まで生きるかなあと思っています。あまり欲がなくて。統計によると95歳から100歳の間が非常に多く減るんですね。90歳から95歳迄の間には10分の1になる。95歳から100歳の間は25分の1になる。90歳の人1,000人居ると95歳で100人になり100歳は4人になる。

宮崎 先生のご出身はどちらですか。

下元 これがね、国籍不明なところがある。親父夫婦は高知県土佐ッポなんです。良く飲みましたねえ、57で亡くなりました。私は小倉で生まれました。小倉の小学校へ通いまして、中学校は県立豊津中学というのが小倉から7里ばかりの所にありまして、そこに通いまして、4年の時に喧嘩しましてね。喧嘩というより正義派だったもんだから、寄宿舎にいましてね。5年生の舎長と意見が合わなくて。喧嘩をしたわけではないんですが、舎監の先生が「それはお前、長いものには巻かれろ。理屈ばかりいったってだめだ」、「そんなことをいうなら俺はこんな学校にいないんだ」といって、中学校を飛び出して東京へ来ました。明治39年でした。東京正則中学校、一高を経て東大へ行きましたが、国籍を聞きますとね、高知県人に入っていたこともある。福岡県人会に呼ばれたこともあるんですが、この頃県人会なんていうものは無くなったんですかね。いい塩梅ですが。

南迫 この間、学会が福岡でありまして、あそこも変わりましたですね。

下元 小倉辺りも随分変わったでしょう。

宮崎 先生が役人を辞められた頃のお話を……

下元 昭和20年8月に敗戦ですね。それで10月に戦災復興院というのが出来ました。戦災によって被った建物の再建をやるんだといって、大蔵省の人員がそのまま復興院へ行きました。私はだから戦災復興院の営繕部長ということで一統を引連れて戦災復興院へ来たわけです。その時の総裁小林一三さんが翌年3月に辞めましたんで、その時一緒に辞めましたのが59歳でした。ですからほとんど大蔵省に終始したんです。戦災復興院にはわずかに何ヶ月かいただけです。その戦災復興院が特別建設局、そして今の建設省へ移行したんですね。

宮崎 事務所を開かれたのはいつですか。

下元 戦災復興院を辞めた時、上司から或る大手請負会社に行かんかとすすめられたけれど、私は役人ばかりやって来て、とても金儲けは下手ですからとことわって、焼跡の庭を畠にして藜を植え、山羊を飼い、晴耕雨読のまねごとをやって居ましたが、西村さんという先輩に「事務所をやったかどうか」といわれて、なんとなく事務所を始めることになりまして、秋葉原の電気屋の2階に、これもやはり大蔵省の古手を2～3人集めまして所員2人私が所長兼小使で、事務所を開きました。昭和24年頃でした。初めての仕事は東京都の警察学校の営繕工事でしたよ。それをやって設計料6万何千円、これを私が貰いに行ったことを覚えていいますから、「百万円の設計料がとれるようになったら大したもんだなあ」とその時は思ったんですが、だんだん大きくなると百万円ではどうしようもなくなっちゃった。始めはこんなもんでした。富山の市役所はコンペで惜しい所で落ちちゃった。コンペといえば若い時外苑の聖徳絵画館ですね。あれで4等になり千円もらいました。今の金で百万円ですか、一等は大蔵省の小林正昭君でした。

南迫 それでは、長い時間貴重なお話をありがとうございました。（ ）は編集部注

昭和56年11月16日

追記 下元先生は昭和56年12月で93歳になられるが、お話し下さる声に張りがあり、ご記憶もしっかりしていらっしゃって、とてもお歳を感じさせません。聞き手の私共が下手な為に充分聞き出すことが出来なかったのが悔やまれます。もし機会がありましたら、更にお話を伺いたいと存じます。（編集部）

話・下元 連

聞・浅見欣也、小高鎮夫、南迫哲也（以上昭和34卒）宮崎勝弘（昭和35卒）愛川高朗（昭和39卒）

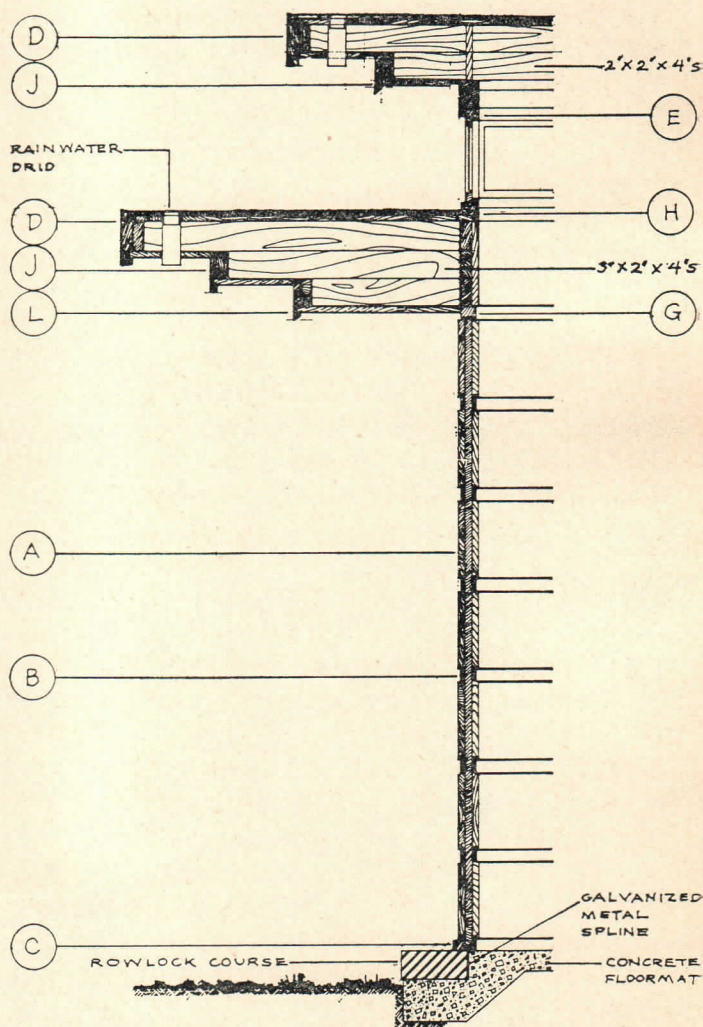
ライトの作品をめぐるって

工学院大学建築学科助教授 南 迫 哲 也

あれ程一時、「もう過去のものだ」とか、「古臭い」と言われていたライトの建物に対して、最近、なぜか見直したり、「好きだ」とか、いう人が増えてきたようです。この現象は、ある意味では大変よいことにはちがいないのですが、どうも「マニツバ」

的な雰囲気がないでもないのであって、つまり「古臭さ」への郷愁でそう言っているの、本当に彼の作品に対する理解があってそれが現代のわれわれの生活に非常に大切なものだとしてそう言われているのではないという疑念が、どうも私には感じられてならないのです。郷愁そのものは別に悪いことではないのですが、少なくとも建築家たるもの、建物の構成それ自体の評価なしでものを言われたのでは、「an an」族、「non, no」族のそしりはまぬがれないでしょう。今年の1月23日（土）に建築学科の運営委員会での企画で私にライトのスライド説明会を行え、との御命令を受けて、ライトの作品のスライド 500 枚を1時間30分で説明しました。1枚当り約11秒になるでしょうか、普段の私の気性からすると猛スピードの映写会でしたが、私があえて、この短い時間にこれだけの枚数を映したかという、ひとつには、なるべく沢山の建物のいろいろのアングルや遠近から建物を見て理解していただきたいと思ったからですし、またもうひとつの理由は、写真が恥ずかしかったからです。少々キザな話に聞こえるかも知れませんが、

どんな写真も、その建物を正直に伝えないからなのです。撮影時には、これこそこの建物の一番よく内容が現れているショットだと思いながらシャッターをきるのですが、どうしてもそのものがとれていない。私が建物から感じた良さの実感



Typical section through the wall of a Usonian house.

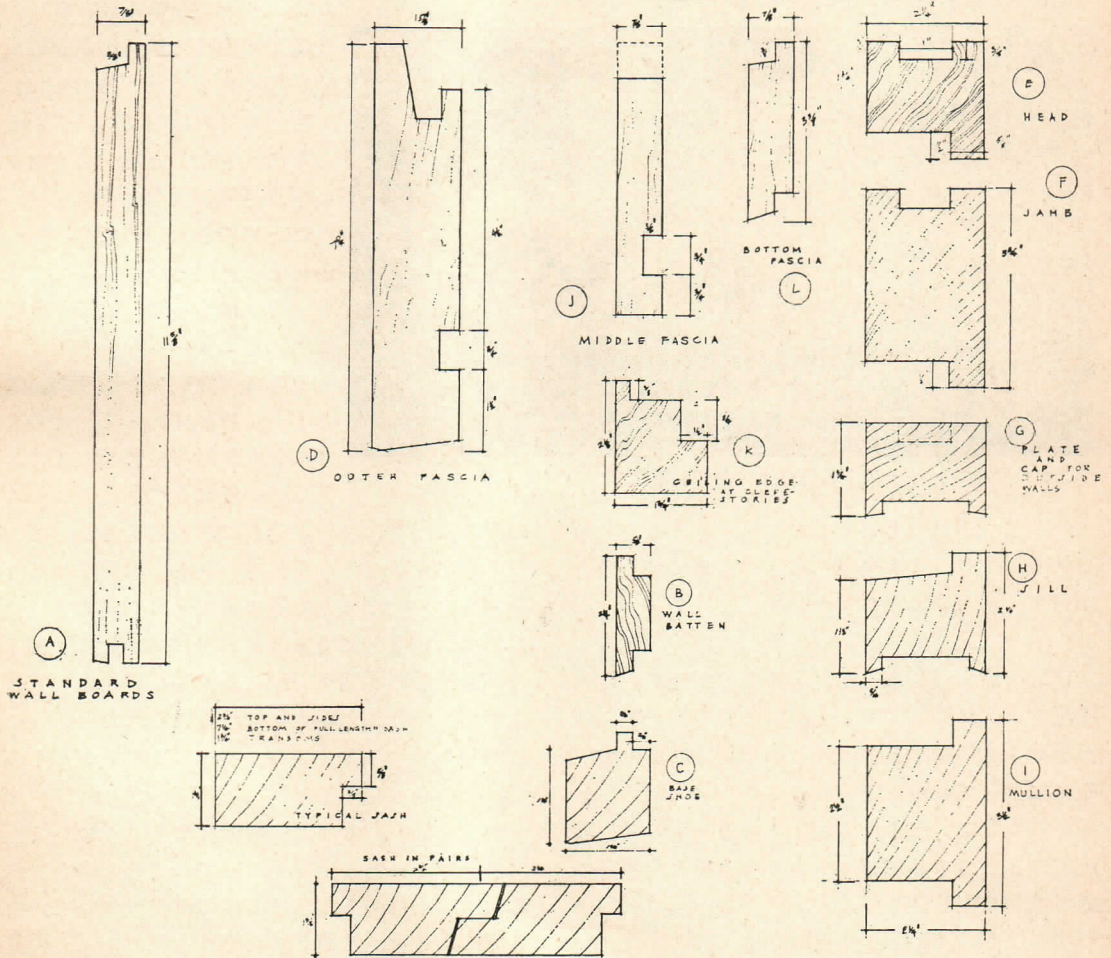
を画面には寸象をも表わしていないのです。

そこで考えたのは、動画のことでした。少しずつアングルを変えたものを連写一眼式に観客のイメージの中で連続的な総体としてまとめてもらえたらどうかと思ったのです。私はときどき、自分の見て来た建物のイメージを取り戻すために、スライドをスピードを挙げて見ることがあるのですがこれは、記憶を呼び戻すには最高です。その画面を映すことによって、映したときのいろいろのことを思い出すのです。《砂漠に入って、足に小粒の栗のイガイガのようなサボテンの実に靴の上から、ビシリと突き刺されたことなど……。》し

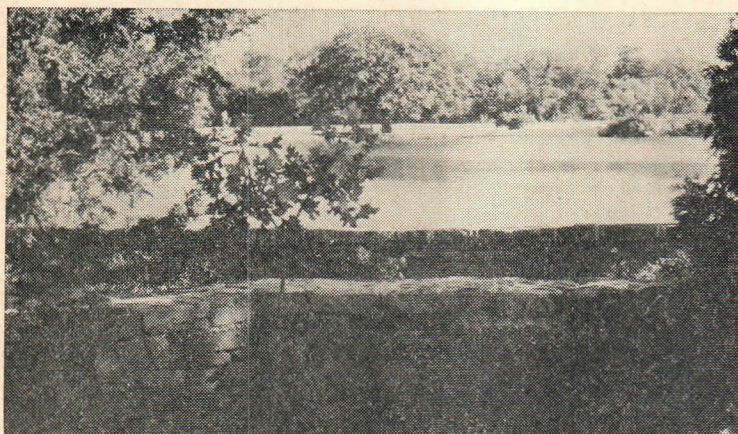
かし、私の画面を初めてご覧いただいた方々にこれを望むのは少々無理であったのです。「いつものように、ジックリと見たかった画面もあったのに」という感想を述べられた方々も居られたようですから……。

そこで、この紙面を利用していくばくかの罪ほろぼしをしようというわけです。

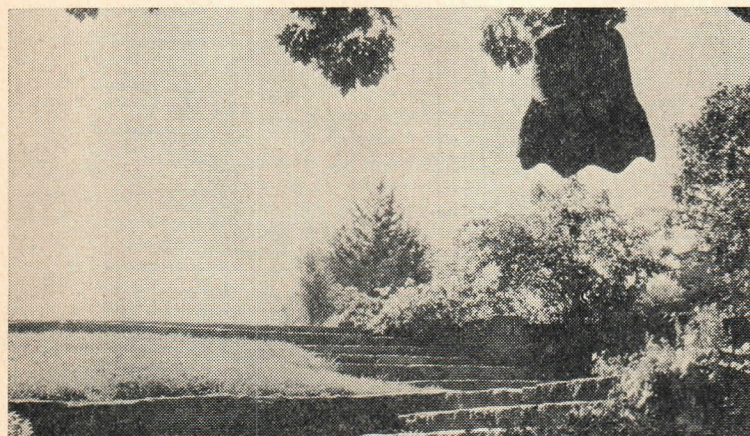
近代建築の中でライトの作品の特徴というと、やはりその生活に密着した、適確な、空間の構成にあると思います、建物が人の生をはげましてくれることにあると思います。



Assembly drawings : some standard Usonian details.



①タリアセン・イーストの池への集水アーチ



②タリアセン・イーストの捲き上げ庭にある風鐺

しかし、それはどのようなことがそうなさしめているのでしょうか？私達にあのように強く働きかけてくるものは一体何なののでしょうか？

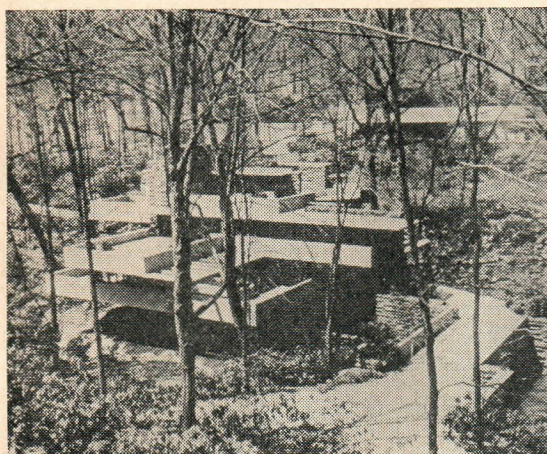
建物が建てられるとき、その建物が建つ土地の状況をいかに深く読みとるか、またその土地の状況を大きく把握するかは非常に大切なことです。それによって、建物というささやかな人間の手を加えることで、大きな可能性のある生活の場を設けることができるのです。ライトの建物を写真ではなく、実物を見に行くと、いつも、その土地の利用の仕方には感心させられます。

たとえばウイスコンシン州スプリンググリーン

にあるタリアセンイーストは、緩やかな丘が大きく起伏している中に船遊びのできる大きな池がある。その水は、広大な丘から流れ込む水でできているのだが池の一边を通っているミッドウェイという農場へ通じる散策通路の下のある一点で写真①のような小造りな石のアーチがありそこを通過して、丘の水が池へ流れ込んでいるのです。広い丘と大きな池を結ぶものとして、この幅1メートルにも満たない小さなアーチは、私にある感動を呼び起こしてくれるのでした。

自然の営みの中では、人がどんなに大きなことをしようと、いずれ自然の大きな流れに逆らうことはできないのです。むしろ自然の意向をいかに肯定するか、それに沿って、人が生きることが真に賢い人の生き方といえるのではないのでしょうか。このアーチは私に向って、そのように語りかけてくれたのです。

丘の中腹に立つ建物がライトの場合に非常に多い。それは、彼自身も言うように「顔でいうと眉毛の位置」に建てることの意味は、そういう位置に建てられた建物と、土地の高い部分とによってはさまれた部分に、常に豊かな生活の雰囲気や湛える空間が現象として発生するというを大切にしているのだということが分ります。タリアセンイーストの場合もそう、この間の空間が非常によく活かされています。大きな榎の木の根元を迂回するようにして上部の庭の方へ上る階段がついていてその中心にある大木の太枝から、五重の塔の軒先についていたと思われる青銅の鐘が吊り下げられていて写真②、それが全体の中で実によい位置を占めている



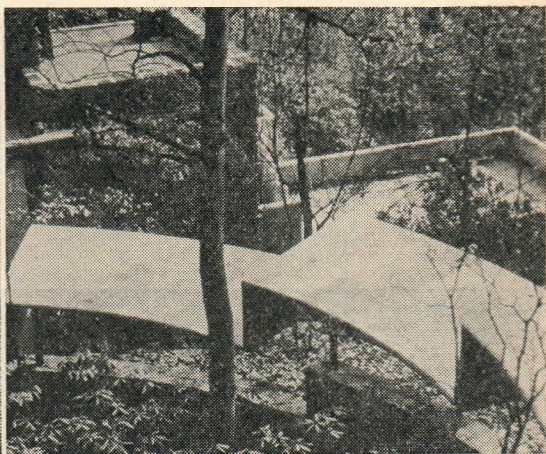
③落水荘アプローチ

のです。

落水荘についても同様で、アプローチは建物の、2階と同じ位のレベルから下りながら1階部分の入口のレベルまで降りて橋を渡って背後の入口に到達する。その裏の更に高いレベルの中腹にある客室棟に到る渡り廊下も完全な半円形を描きながら屋根と共に捲き上っている、建っている土地のその地域の植物をいろいろと眺めながら登って行く仕掛になっているのです。写真③、④。

このような自然界の状況を巧く利用して人の生活を豊かにするという方法は、現在、私達の日常生活からは、ほとんどかけ離れた世界であるかのように思われるかもしれません。しかし、私にはそうは思われないので、都市の中に、かすかに残っている地面の起伏や、川や濠の存在は大切にしたいものです。そうした自然の与えてくれたものを、平地にし、コンクリートスラブの下に埋め込んでしまう都市計画は、いずれその矛盾を自然の動きの中で教えられることになるのでしょうか、建築家の資格が物事の洞察力にあるとするならば、人の日常生活とそれにピッタリと合った空間を、この地上にいかにか手際よく、すくい出すか、大切なことだと思います。

ライトの建物では、このような空間がいかにか手際よく、自然界の洞察力に富んだものとしてつく



④落水荘の客室棟への渡り廊下

られたかがわかるのですが、更に他の近代建築家と異なる点は、その材料の使用方法についても、大変な思索があったということにあると思います。

それは、建物の構造と深い関わりがあると思いますが、空間の性格、ひいては、そこで行われる生活の性格を総合的にどのように造り上げるかというヤサシイ配慮が、キメコマカに考えられたということです。

壁面の構成を考えてみても、上部のシェルターを支える構造壁と、開口部と一体に考えられた Boards and Battens の方式は、ライト独自の考え方の結晶でできたカーテンウォールであると思います。(図1) まずコア材としてのタテの板(多くの場合合板が用いられた)両面に押しブチ(Battens)で下見板(Boards)をビス止めする方法は壁自体非常に薄く、しかもノビノビとして、共持ちのシッカリとした壁面です。開口部についても、ランマなどの建具は板に明り取りの穴を様々なデザインで繰り抜き、ガラスをサンドイッチ式にはさみ込んで、やはり両面からビスで止めてつくるのです。私も、我が家の郵便箱の取り出し口にこの方式を手製で作ったのですが大変調子のよい建具ができました。

ライトは私の生涯の研究対象となるでしょう。

建築家アントニン・レーモンドについて

北 澤 興 一

(工学院大学36年卒)



◀軽井沢山の家

■アントニン・レーモンド年譜

1888. 5. 10	現在のチェコスロバキヤであるボヘミヤのクラドノ町に生まれる。
1910. 22歳	プラーク工科大学卒業、当時のヨーロッパ運動よりむしろ作品集で知ったライトやアドルフ・ロースに会って聞いたアメリカの様子などに影響されてアメリカに渡り、カス・ギルバードの事務所で働き現場なども手懸る。
1914. 26歳	イタリーに行き絵を描く。当時のレーモンドは画家になろうとさえ考えていた。妻のノエミ・ベルネサッサンに会ったのはこの時でニューヨークに帰って結婚する。以後ミセス・レーモンドはインテリアデザイナーとして常に協力して二人で仕事をする。
1916. 28歳	ウイスコンシンのタリアセン、F. L. ライトの許に行く。超人的で一分の妥

建築家アントニン・レーモンドについての原稿を依頼され、簡単にひき受けたものの、非常にむずかしいことに気がついた。最も尊敬する建築家であり、晩年の1961年から亡くなられた76年の15年近くを師事した私にとっては、書きにくいことであった。私はレーモンド事務所に入社した最初に、南山大学総合計画のスタッフに入り以後レーモンドさんの直接設計する仕事に従事することが出来て、最も身近に生活することができた。これは大変幸運なことであった。

事務所でのレーモンドは非常に厳しく、緊張の連続で仕事をしたものであった。当事の事務所は80名からの所員がおり、その中で10名程が小部屋でレーモンド直接スタッフとなっていた。

レーモンドは1日に4回位は各スタッフの設計図面をチェックして廻る仕事の進め方であった。自分の順番になると極度な緊張を感じ、それは恐

		協もなく、自ら信ずるところに従って厳しく己れを律しているライトの人格に接し強い影響を受ける。
1917. 29歳		ニューヨークに戻り独立し最初の仕事ガリック劇場の改造を手懸ける。
1919. 31歳		ライトと共に来日し、帝国ホテル建築の仕事に従事する。初めて見る日本の美と知恵の中にレーモンドの探し求め具現化したいと望んでいた建築の姿を見出し以来日本に住みつ়ことになる。
1920. 32歳		米国建築合資会社を作り設計事務所として独立、東京テニスクラブ、四谷教会、東京女子大学、後藤新平邸等がある。一連の作品にはまだライトの影響が現われている。
1923. 35歳		関東大震災の年、レーモンド設計事務所を名乗る。この年に建築家の家（霊南坂の自邸）を設計。全面コンクリート打放しコートハウス、スチールパイプ椅子、出隅に使われたサッシュなど目新しいものがデザインされた。
1926. 38歳		聖心学園（神戸）、シェル石油、スタンダード石油等の設計、チェコスロバキヤ在日名誉領事となる。（1937年迄）
1928. 40歳		聖ロカ病院計画、イタリア大使館別邸アメリカ大使館、赤星四郎別荘、フランス大使館、清心高等女学院、東京女子大講堂、軽井沢聖ポール教会、聖母女学院、軽井沢夏の家等戦前の代表作が次々と設計された。
1936. 48歳		インドのボンデシエリー寄宿舎を設計37年日本を去り、インドに行く。
1938. 50歳		ペンシルバニア、ニューホープの農場にアトリエを兼ねた家を持つ、タトルシーリーブレース等と協同事務所を持つ。ロックフェラーセンターで最初の建築個展を開く。
1945. 57歳		L. L. ラドと共にニューヨークに事務所を持つ、亡くなるまで維持された。
1948. 60歳		再び来日、東京事務所を再建する。
1949. 61歳		リーダーズダイジェスト日本支社を設計、構造家ワイドリンガーの協力を得

怖でさえあった、気に入らない所があると大声で怒鳴られ、即座にスタッフからはずされることもあった。図面の進行が遅くても叱られるために時間との競争であり、1日中が室内にピーンと張りつめた設計姿勢はすばらしいものであった。そのようにして、レーモンドの代表作品が次から次へとできあがっていったのである。

毎年の行事のひとつに夏の2ヶ月間をレーモンドは軽井沢に設計場所を移して過ごすことがあった。建築のスタッフ3～4名で総勢10名位が移動する。私もこの軽井沢合宿に毎年のように参加できたことは、貴重な体験となった。軽井沢ではその年に於ける最も重要な仕事の基本設計を進めたのである。所員は離れで合宿して毎日9時から5時迄を主屋のアトリエでレーモンドと設計の仕事と共にした。麻布の事務所と同じように緊張した毎日ではあったが、家族的で親しみのある楽しいことも多くあった。週末にはレーモンドさんが顧客や友人を呼んで夜の庭でバーベキューを楽しんだり、みんなで野山を散歩したり、ある時はいきなりゴルフに連れて行かれて、新軽井沢ゴルフでレーモンドさんと一緒にプレイできたことは感激であった。軽井沢でのレーモンドの生活は、設計を我々と共にすることは勿論であるが、毎朝4時～5時に早起きして、ミセスレーモンドと他に3匹の犬と散歩に出掛ける。そして絵を描いたり、彫刻を造ったりして、良い作品ができると我々スタッフを集めて説明してくれる。昼食後はきまって昼寝を欠かさない。夜は8時には就寝するという規則正しい生活であった。我々スタッフはレーモンドの目をかすめて夜の町にくり出したり、夜を徹して議論することもよくあった。みんな良い思い出である。この軽井沢アトリエはその後私がレーモンドより譲り受けて現存している。

■日本の近代建築史に於けるレーモンドの意義

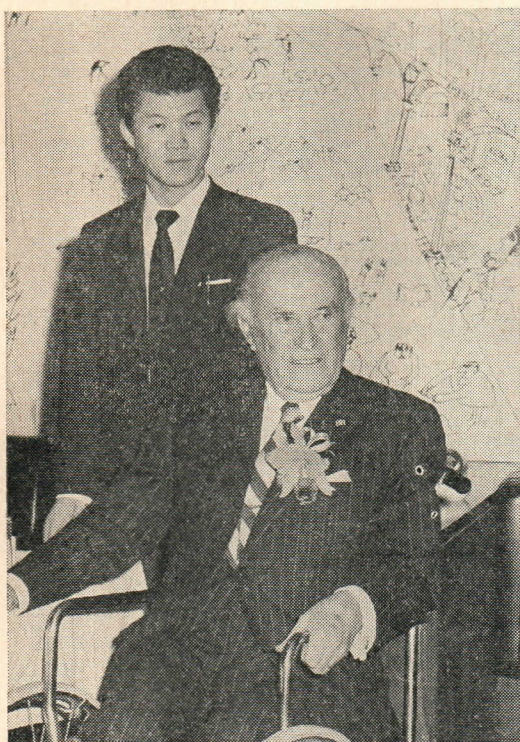
アントニン・レーモンドの建築家としての生涯は1973年、85歳で日本を去る時に終った。1919年来日して、実に54年間で東京のレーモンド設計事務所とニューヨーク事務所を毎年往復しての設計活動であった。

	たこの建物はレーモンドの代表作となった。新しい建築方式や、水平ルーバー、引違いサッシュ、カーテンウォール等日本の近代建築の一つの原型となった。又床のPタイルや吸音テックスを始めルーバー付埋込灯、冷暖房ヒートポンプ方式など新しい技術を日本に導入した最初の建築作品である。
1950. 62歳	アメリカ建築家協会名誉会員となる。麻布の高台にアトリエと自宅を造る、木造平屋建で杉丸太と障子が入ったアトリエに所員80人と共に設計活動を精力的に進める。
1952. 64歳	グアム島空軍基地計画、日本楽器東京支社、アメリカ大使館員アパート、MGMビル、カニンガム邸、安川電機本社、聖アンセルム教会、アルバン教会等数多くの作品ができています。
1957. 69歳	群馬音楽センター、ICU総合計画、伊藤邸、ルーテル教会、イラン大使館葉山別荘
1961. 73歳	南山大学総合計画、聖十字教会、聖ミカエル教会、軽井沢夏の家
1963. 75歳	神言修道院、ブライス邸、立教志木、
1964. 76歳	勲三等旭日章を受賞、日本建築家協会終身会員となる。銀座松坂屋、新発田カトリック教会
1968. 80歳	ハワイ大学国際会議場センター計画、アイルランド神言修道会寄宿舎、上智大学四谷及ハタノ計画
1970. 82歳	10月個展「アントニン・レーモンド展」を銀座松坂屋に於いて開催する。建築、絵画、彫刻等レーモンドの芸術活動の生涯を整理発表する。内容のあるすばらしい個展となり、これが最後の花道となった。自伝の出版ができた。
1973. 85歳	アメリカに帰国、関係者の少数しか見送りでできずさびしい帰国であった。
1976. 88歳	10月25日死亡、米ペンシルベニア州ニューホープの自宅で死去。8日に日本での追悼ミサがセントアンセルム教会で盛大に行われた。

レーモンドの日本近代史に占める意義は、一般に知られているよりも、はるかに重大な役割を果たして来たとは私は考えている。大正時代から昭和50年代に至る日本の建築デザインの近代化によって決定的な影響をもたらしてきた。作品の一つ一つを大切にしてい貫したデザイン哲学のもとに多くの作品を完成させて来た。近代建築史の上で国際的な建築家であり、又日本の建築家であるといえよう。デザインに対して妥協は絶対になく、あくまで自分の主張を貫き通した建築家で、それだけに仕事に対しては厳格で失敗を許されなかった。仕上材料や新しい工法を常にとり入れて、質の高い仕事を積み重ねてきた。

レーモンドはプラグとパリで学び、ニューヨークで働き、ベレーやライトのような近代建築家を師匠に選んで、ひろい国際的視野と前衛的な感覚をもったことは明らかである。ユルビジェの合理主義デザインの影響を受けていることは1923年の建築家の家（霊南坂の自邸）や28年の軽井沢夏の家（旧別荘）等で証明される。この時期がライトの作風から脱却して、日本に於ける近代建築がレーモンドによってもちこまれたと云えよう。今も残っている霊南坂の家は装飾のない外観、コンクリートの打放し仕上にスチールサッシュや鋼製パイプ椅子等々、世界的にも最も新しいアイデアが実現されている。それはレーモンドが世界の近代デザイン運動の波の行く手をつかみとっていた建築家であるといえよう。

レーモンドは近代建築の原則を教えてくれたのは日本のお百姓さんの家であったと述べている。「横浜についた私は東京まで車でくる途中の日本の風景に世界で一番美しい国へきたとおもった。お世辞でなく、心からそうおもった。総合ということは建築の根本原則の一つだが私は日本の風物の背後に一つのすばらしい総合をみたのである。建築や風物にも非常に心をひかれた。そして、人と建物のすばらしい総合あるいは統一性が非常に美しかった」これはレーモンドが初めて日本に来た時のことを語った一部である。こうして日本を愛し、日本建築からレーモンドのデザイン哲学が生まれていった。その哲学を我々は次の様に聞か

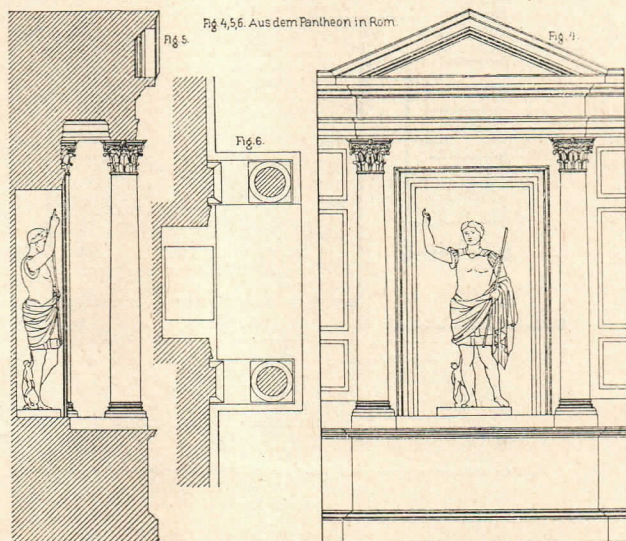


レーモンドと筆者

されていた。「自然は人工よりも美しい。簡素は複雑よりも美しい。節約は浪費より美しい結果を生む。そして機能的で明快でなくてははいけない。これらによって建築の本当の骨組が人体の骨格のように力づよく現われる」。

具体的作品例として、レーモンドの自邸(麻布)、軽井沢の山の家(現存)などにその頂点がしめされている。いわゆるレーモンド調の木造住宅建築である。日本の木造建築の伝統の上にその近代化として成功している作品である。柱梁の骨組は杉丸太で表にあらわして、屋根裏のない垂木を見せた空間は豊かですばらしいものである。洋間も日本間も障子を全部つけて、壁はラワン合板である。この原則はどんなに予算のある高級住宅でも一貫して押し通したものであった。

リーダーズダイジェスト東京支社、アメリカ大使館員アパートなどの鉄筋コンクリート造は当時の日本に建つ建物としては衝撃的なもので建築界への影響は計り知れないものがあつた。その後の群馬音楽堂や南山大学のデザインは日本近代建築の歴史をつくって来たと云っても過言ではない。



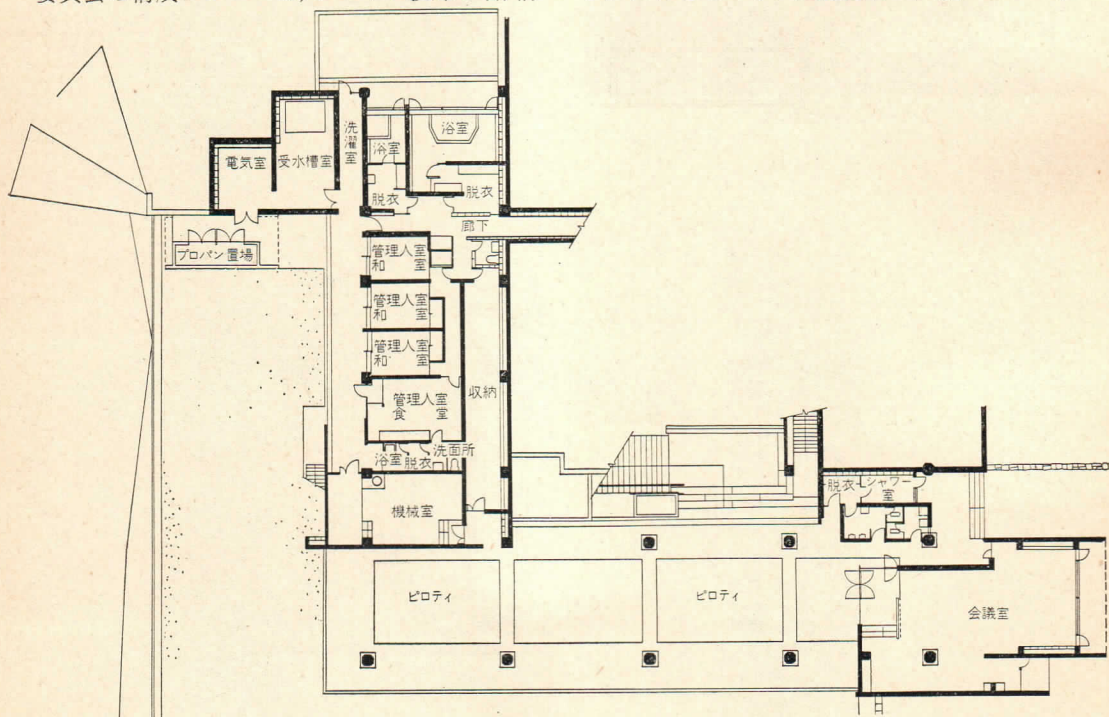
富士吉田セミナー校舎の設計について

波 多 江 健 郎

この施設は本学園90周年記念事業の一環として計画され、今年の3月に完成したので、プロジェクトの段階からすればちょうど5年目に日の目を見たことになる。昭和50年頃から富士吉田校地にセミナー校舎をという話がもち上がっていたが、まだ具体的な進展はなかった。しかし一度ついた火は消えることなく、その後、着々と具体化の方向をたどり、51年7月には、提案施設の条件および内容が呈示された。それを受けるような形で建築学科に大学施設委員会が設けられた。

委員会の構成メンバーは、デザイン教師 3 名、構

造・生産・設備教師各1名であった。委員会では、計画におけるソフトの面から基本計画に至るまでの討議が重ねられた。担当者であり推進役の私のほうで、その都度問題を出しプロジェクトを提出し、委員会で合意を得るまで続けられた。各自建築教育にたずさわる教師が討議を重ねることのむずかしさとしんどさは想像以上であった。しかし一方では、それを乗り越えて具体的な敷地環境に対して、互いにデザイン理念をぶつけ合うことは、今にして思えば非常に貴重なものであったと思う。むしろその中に建築教育の真髓があるに違い



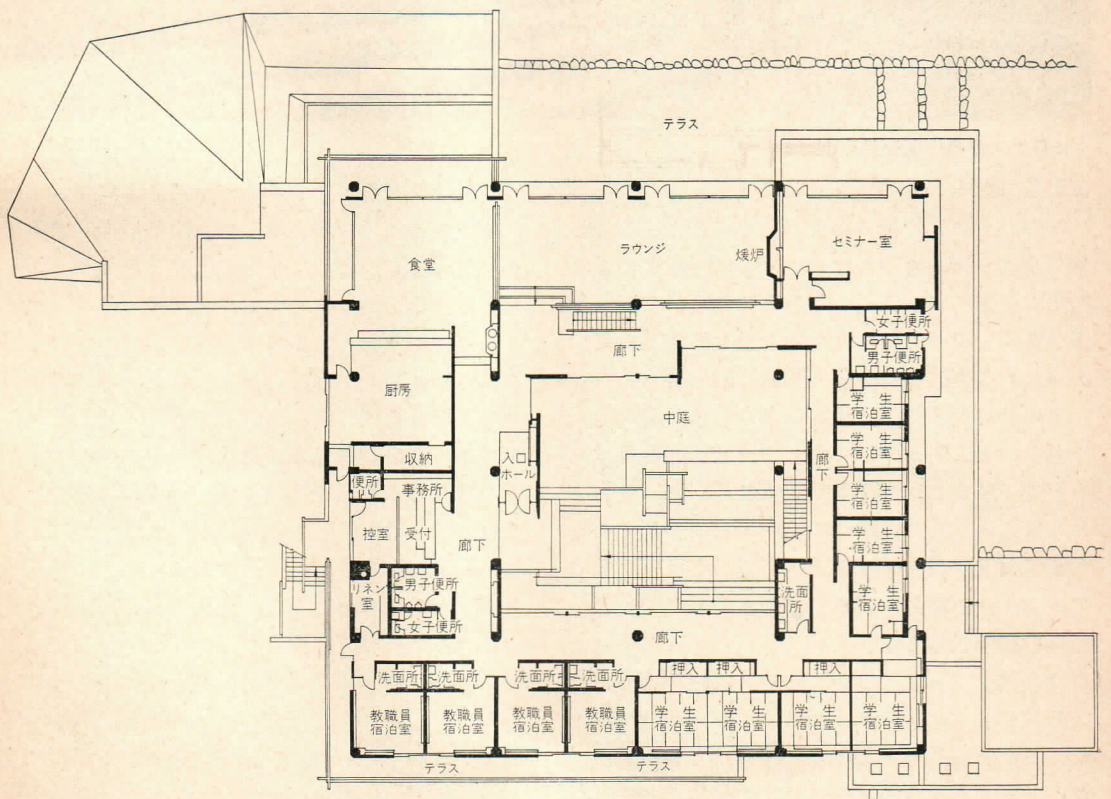
1 階平面

ない。もともと私たちデザイン教育にたずさわる者にとって、自分たちの大学の施設を設計することは喜びであると同時にそのきびしさとプレッシャーは想像以上に大きい。アメリカの大学の多くでは、新しいディーンが来るとまず大学の建物を設計する。そしてその建物での教育が学生にとって最も具体的なデザイン教育となる。教師がいかに美辞麗句を多く並べても、具体的な空間が学生を満足させるものでなければ、彼はデザイン教師の座から去らねばならない。とくにこのプロジェクトのように南に富士山を望む恵まれた大自然を前にしての私の場合も同じような心境であった。

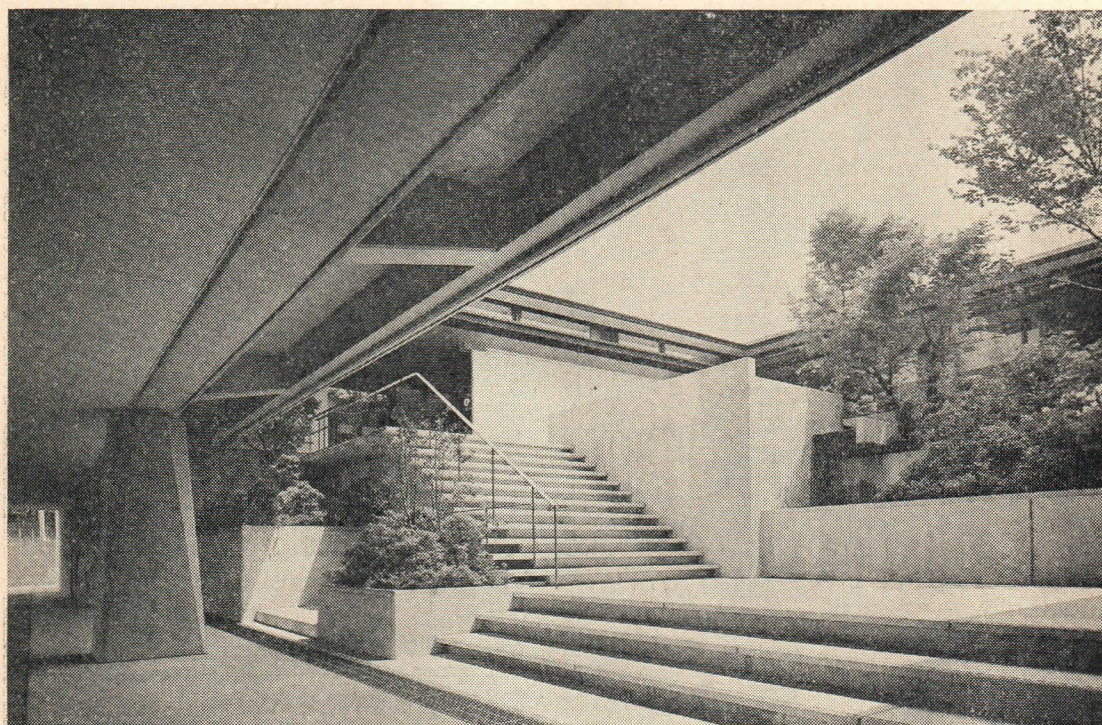
発 想

広々とした大自然を前にした時、想い出されるのはアリゾナの広々とした赤土色の砂漠で、ゆる

やかな丘の上の石積みの低い煙突とその左右に伸びた布基礎のような低い擁壁を見たことである。この擁壁は遙かに続く砂漠と生活領域との界壁として働くのであろう。大地と煙突と擁壁のシルエットは、青い澄み切った砂漠の空を背景に、私には忘れられない印象として残っている。この建物の設計者はフランク・ロイド・ライトであったが、火災により石積みの部分だけが残っていた。建物に近づいてみると、現在、シェルターもストラクチャーもない、単なる石積みの部分だけであるが、暖炉を中心としてその回りに空間がいかに展開し、擁壁がそれぞれの空間の受け皿としていかに働いていたかが容易に想像できる。ここにある煙突と擁壁は砂漠の住宅にとっては絶対に必要なものであったに違いない。それは、現在各地で掘り出される遺跡から往時の生活がしのばれるの



2 階 平 面



ピロティから中庭を見る

と同じである。

このセミナー校舎の場合、敷地が富士山のゆるやかな北斜面にあるわけで、その勾配をどのように受け止め、いかに従いながら与えられた空間構成を展開してゆくかが私たちの最も考慮した点であった。具体的には擁壁の配置計画と言ってもよい。擁壁はある時は土留めになり、ある時は内部外部を含めてアクティビティの空間構成を分け、ある時は自然と人工環境の領域の界壁として働くわけである。とくに富士山に向かって伸びている擁壁は食堂、ラウンジおよび下にある浴室からの富士山への眺望軸を表わし、それぞれの空間を分ける界壁としても働いている。したがってそれぞれの擁壁によって分けられた空間は、その中で行なわれるアクティビティによってレベルを設定され、地面のレリーフが出来上がったところで、一枚のシェルターをかけたのがこの建物である。建物としては一部は2階建であり、他は1階建の構

成になっている。シェルターが富士山に対して水平の形をとっているのは、富士山の形に対する足下のたたずまいとして十分に働くと思われるからである。建物が一枚のシェルターの下にコンパクトにまとめられているのは、環境条件のきびしいここでは暖房、給湯、給排水、電気等の諸設備の効率・維持管理の面から有利であり、施設の利用が容易である。またこの建物の特徴のひとつとしての囲みのパターンは、通風、日照等の原論的な面以外に、人工的な中庭空間をつくることによって、天候に左右されることなく種々のアクティビティに利用できることと、中庭の回りが回廊になっているために、回廊を通る人びとを容易に識別できるスケール約15×15mに押えている。これは中庭を通して人びとは互いにコミュニケーションを保てるからである。中庭床のテクスチャ、レベル、植樹、池等のデザインに相当のエネルギーをかけたのは、中庭空間が人びとの活動を誘発す

る役割を果たしてくれると思われるからである。中庭には富士山からの清水が静かな音をたて、小鳥が水浴する姿を見かける。

配 置

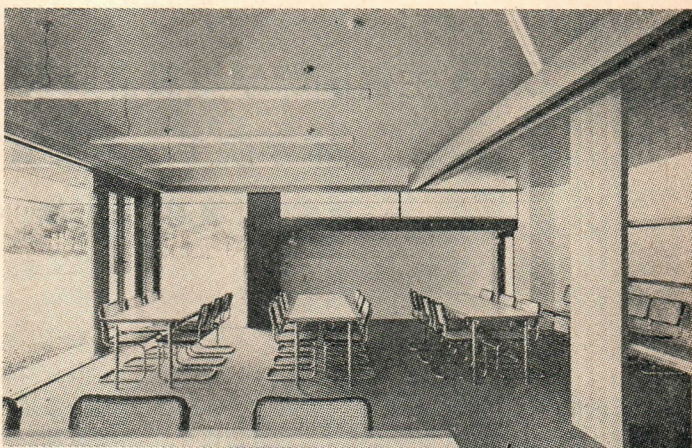
建物は、敷地全体のほぼ中心にあって北側の最も低い所に大きなグラウンドがある。旧学寮はその入口近くにある。建物の西側から南側（富士山側）にかけては、かつて管理人の方が植林された唐松林が今では大きくなり、北側にある活動的なグラウンドとは対照的に静かな森を形づくっている。学園関係者がスポーツに、文化活動に、そしてゼミ等の授業の延長として敷地全体を使用する場合に、このセミナー校舎がそれぞれの活動の拠点として十分に働くことが想像できる。

建物回りのゾーニング

施設へのアプローチの場合は必ずピロティ部分から中庭に入る。目の前の主階段を上がり、中庭空間を媒体にして玄関ホールに入る。ピロティ西側にある大セミナー室は地域社会の人びとが気軽に利用できるようにピロティから入れるようになっている。

東：施設に対するサービスゾーンとして働く。したがってグラウンドレベルには駐車スペース、管理人住居、機械室があって、2階には厨房関係諸室および管理事務室がある。

南：低いレベルに浴室、その上に食堂がある。ラウンジ、中ゼミ室は敷地のレベルになじませるように外部に砂利敷きのテラスを設けてある。これらの諸室からは南側にある松林の上に雄大な富士山が何の障害物もなく眺められる。ラウンジ、食堂等の広さに余裕があるのは、利用者が多種多様な場合にある程度のプライバシーが保てることと、将来、利用者がふえた時に対応できるように考えてである。



小 セ ミ ナ ー 室

食堂レベルとラウンジレベルを玄関ホールおよび廊下部分のレベルより上下させているのは、両空間とも廊下に対してオープンなので廊下を通る歩行者からのプライバシーをある程度守り、それぞれの空間の自立性を重んじたからである。

西：松林を越えて明大の牧場に接する静かな環境に対して学生の宿泊ユニットを配置した。宿泊ユニットのテラスからは静かな松林に容易に行くことができる。将来バンガロー風の宿泊ユニットをふやす場合には、こちらの松林の間が適当であろう。

北：ピロティ部分はアプローチとしてだけでなく、種々の活動に対応できる貴重な空間である。天候の悪い時には体育のスペースとなり、中庭と一体となって演劇、コンサート等にも利用できるだろう。ピロティ上部には洋室(4)和室(4)の宿泊ユニットがある。宿泊室前の廊下のアルコーブからは、ラウンジの屋根の稜線の上に富士山を眺めることができる。

日頃、新宿の超高層建築に囲まれたキャンパスを考えれば、この5万㎡余の敷地と豊かな唐松に囲まれ、雄大な富士山の下での授業、各種のアクティビティ等はすばらしいに違いない。この施設によって、広い意味での教育がこのように恵まれた自然環境の中で行なわれる意味は大きいであろう。

はプロジェクトをまとめる上で大変重要なコンセンサスでありました。

そしてプロジェクトの第2のポイントは、このような都市の荒廃に対して再生を論ずるとき、そのデザイン戦略としての小ユニットとは何なのかということでした。初期の段階では、小ユニットのスケールについて明確な基準をもたないまま、実際に東京の街を歩いてみて歴史的なアイデンティティの高い場所、たとえば東京のカルチュ・ラタンと呼ばれる駿河台一帯の大学街であるとか、下町として比較的まとまりをもつ佃島界わい等がその対象として登場したこともありましたが、しかし歴史性に着目しようとすればするほど、そのような場所の余りにも少ないことに気付くばかりで、むしろ歴史性をもちながら埋没していく東京全域が再生の対象となるべきではないかと考えたのです。そして東京の既成市街地のひろがりのなかで共通因子的な小ユニットとは何かということに問題の焦点が移っていったのです。

■小ユニットとしての「坂道」と「橋」

かねがね、私は東京の「坂道」と「橋」に興味がありましたが、それは歴史考証的なものではなくて、地形との関係における風景の構造的性に対してのものです。つまり東京の街には、町名地番はあっても街路に名前はありません。しかし一方で「坂道」と「橋」には歴とした名前があります。これは、古くは江戸時代以来の市街地の形成過程とその街路型態とに関係していることですが、いずれにしても昔の人達は、「坂道」にしても「橋」にしてもその風景を都市を読みとる重要な道しるべとしていたと考えられるわけです。そしてこのことが、今回市街地再生の小ユニットとして「坂道」と「橋」を選んだそもそものきっかけであったのです。

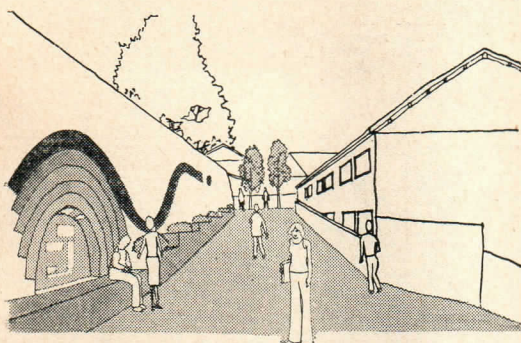
「坂道」と「橋」は、その地形的特性とその位置する空間的特性によって、永続的な担保性の高いものであるといえます。そして何らかのかたちで、オープン・スペースと関係していることが多く、坂上とか坂下に寺や社があったり、また比較的宅地規模の大きい公共施設、あるいはそれに準ずる建物が配置されていて、あたりの樹木が小公

園に匹敵する景観をつくり出すこともあります。また「橋」は、必ず濠や水路の上にあるわけですから、その空間的なひろがりも確実に保証されています。また時には、わずかばかりではあっても、橋詰空間が残っていることがあり、これらは過密な下町にあっては貴重なオープンスペースであるといえます。

東京には、数にしておおそ400近くの、しかも旧くから名前のついた坂道があり、台地と谷地の複雑に入りまじった山の手のように分布しています。一方、埋立と堀割開削が同時に進行して形成されてきた下町の市街地には、街区と街区を結ぶ「橋」が、山の手坂道に匹敵するほど沢山存在しています。そして、こんなにちの市街地が過密となる以前の段階では、「坂道」は微地形と呼ばれる台地と谷地の両者を結ぶ道しるべとして、また領域をへだてる一つの分界点として大変

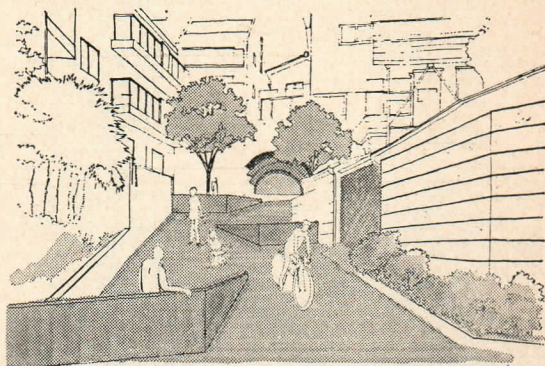
Location of Slopes and Bridges in Tokyo





perspective

AFTER REHB.



perspective

AFTER REHAB



重要な意味をもったはずで。同様に「橋」も段階的に形成されていった街区のつなぎ手として、また平坦で街路の直交する市街地の道しるべとして重要な風景であったと考えられます。

しかし市街化が進み、居住密度が高まるだけでなく、人々の生活領域も単純なものから幾重にも幅輻するにしたがって、人々の領域に対する「場の意識」があいまいになると同時に、その歴史的な文脈からも疎外されてきたわけです。そして、連綿としてつながる東京の市街地からは、その深層構造としての地形的特性も固有の風景も大変稀薄なものとなっているのが現実です。

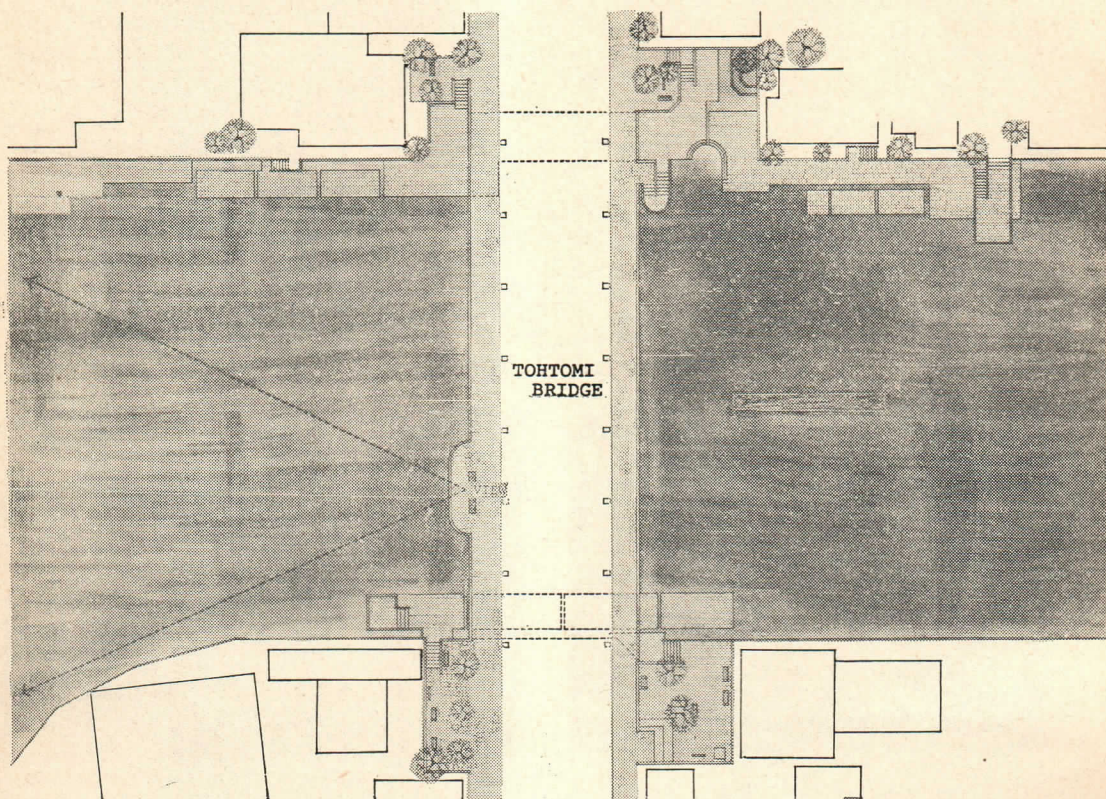
そして今一度、この「坂道」と「橋」に着目してみると、これら二つは実際われわれの町の中で風景としても空間としても、みんなが共有する特異点であると考えられます。したがってこれらは、本来公共性の高いものに位置し、云いかえれば都市の中でそのアイデンティティを高めるに値する小さな都市空間です。ですから、既存

の居住環境の公共空間を少しでもふやすという意味において、この「坂道」と「橋」は、それ自身が新しいタイプの生活街路として整備されれば、近隣地区再生のきっかけとなる可能性を充分にもっていると考えられます。

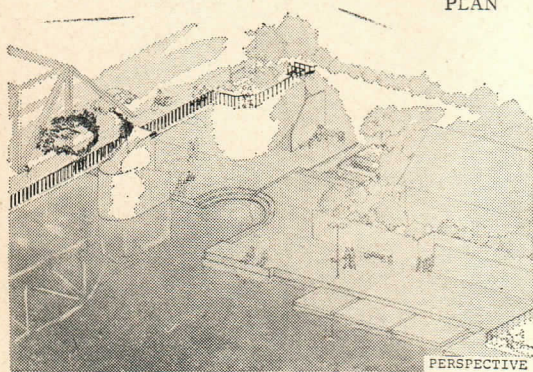
■既成市街地の再生

今回のプロジェクトでは、ケーススタディとして新宿区若葉町における「坂道」の修復と、江東区牡丹町の「橋」の修復を具体的な地区再生の戦略として提案したのです。

計画対象地となった若葉町は、17世紀のはじめ江戸城の外濠築造の際に、四谷あたりから寺が門前ともども移転してつくられた街だといわれている所です。ここには、それぞれ固有の名前をもつ10本の坂道が、谷地全体をとりかこむような形で存在しています。もともと寺町であったこの街には、坂上の寺と坂下の門前という基本的な構造があったと考えられますが、現在でもその間の坂道



PLAN



PERSPECTIVE

は云わば境界領域的な意味で、また周辺台地から谷地へ、あるいは谷地から台地への移行を示す道しるべとして存在しています。したがって、このように歴史的な意味性の深い「坂道」を、あらためて部分的に修景したり、またある区間に限って坂道自身を公園街路化することによって、そのアイデンティティが明確になれば更に新しい特異点

となって地区再生の起爆剤になることが期待されるのです。即ち、Rehabilitator（再生起爆剤）としての坂道に着目したわけです。

同様に牡丹町は、明治時代の終りにかけて完全に内陸化したあと、いくつかの段階をへて周りの街区と10本の橋によって結ばれている街です。これらは、地区幹線道路上のものや、全く地元の人々のローカルな通行にしか使用されないものまで、それぞれ機能や架構スケールが異なります。橋の場合も、坂道の修復同様に、その位置や周辺状況から修復の難易度が診断され適用すべき手法が決定されます。ここでは、橋自身の公園街路化が新しい公共のオープンスペースをつくり出す有効な方法として考えられていますが、一方その橋の再生の重要なものとして、橋詰空間への着目が挙げられます。東京の下町には、現在でも沢山の橋がありますが、かつて濠や水路が運河としての機能をもっていた時代には、その橋詰は、親船から

小船へ小船から陸へと荷揚げが行われる場所として殷賑をきわめたと云われます。現在では、その形跡をみつけることもむずかしいのですが、なかにはそれと判るわずかな空地が残っていることがあります。そこで、このような歴史をもった小空間を活用して、そこに再び親水性のある小公園をつくるのが、橋の修復として提案されています。牡丹町の場合には、もともと島状のまとまりある地区形態をしているので、このように橋自身の公園化や橋詰の再生は、小さな公共空間の整備とともに、街全体の歴史的なアイデンティティを高める上で、極めて有効な戦略と考えられるわけです。

■おわりに

東京の「坂道」と「橋」の具体的な再生を通じて、人々の既成市街地に対する「場の意識」、つまり人々がそこを熟知し帰属性を感じ得るような魅力の回復をはかろうという提案は、実はその場所の歴史性の回復を意味するもので、このことこそ再生の思想の原点であろうかと思います。

考えてみれば、今回の提案は、国際コンペとは云え、世界というひろがりの中でみれば東京というきわめてローカルな地域での話であって、決して誰もがすぐに理解しうるほど一般的なテーマであったとは考えられません。にもかかわらず、国際的なレベルで一つの関心を集めたのは、これからの再生の主題として、世界の多くの都市で既成の居住環境の整備の問題があるとするれば、この提案の中にはそのためのデザイン戦略として小さな公共空間への着目と、そのRehabilitatorとしての発見があったからではないかと思います。

以上、工学院大学院生チームの受賞作品の内容について、主要部分の説明をしました。これを機会にこの提案が更に発展して、次のテーマを発見する糸口となることを願うものです。

■製作メンバー

・大学院修士課程

石川啓司, 関根久雄, 高木雅行, 西林和夫,
船越康弘, 三浦湖人, 杉山隆司

[illegible]

深海流

[illegible]

坂道と橋再生の提案

[illegible][illegible][illegible]

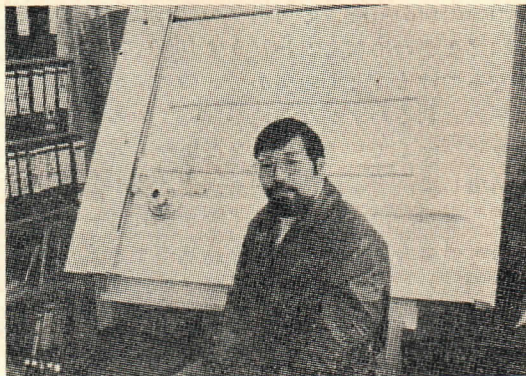
■最近のコンペ入賞一覧 (56年度)

1. 第4回読売住宅コンクール
「老人同居住宅」 1位 浅羽 昌之 (54年卒)
1. 第4回読売住宅コンクール
864点中 佳作 池上 純一 (47年卒)
1. 江戸川区立葛西沖小学校競技設計
1佳 谷口 宗彦 (46年卒)
1. 荻須美術館競技設計 佳作 武藤 章 (教授)
(稲沢市立美術館)
1. 荻須美術館競技設計 佳作 戸尾 任宏 (講師)
1. 第八回日新工業建築設計競技
佳作 内山律(院生)・土田正勝・種市俊也・大森弘

アロルセン(西ドイツ) の町から

勤務先 DIPL. ING. ARCHITEKTEN
KRÖLING+MÜNTINGA
TWISTESTR. 42
3548 AROlsen

田中正美
(1964年 建築学科卒業)



事務所にて

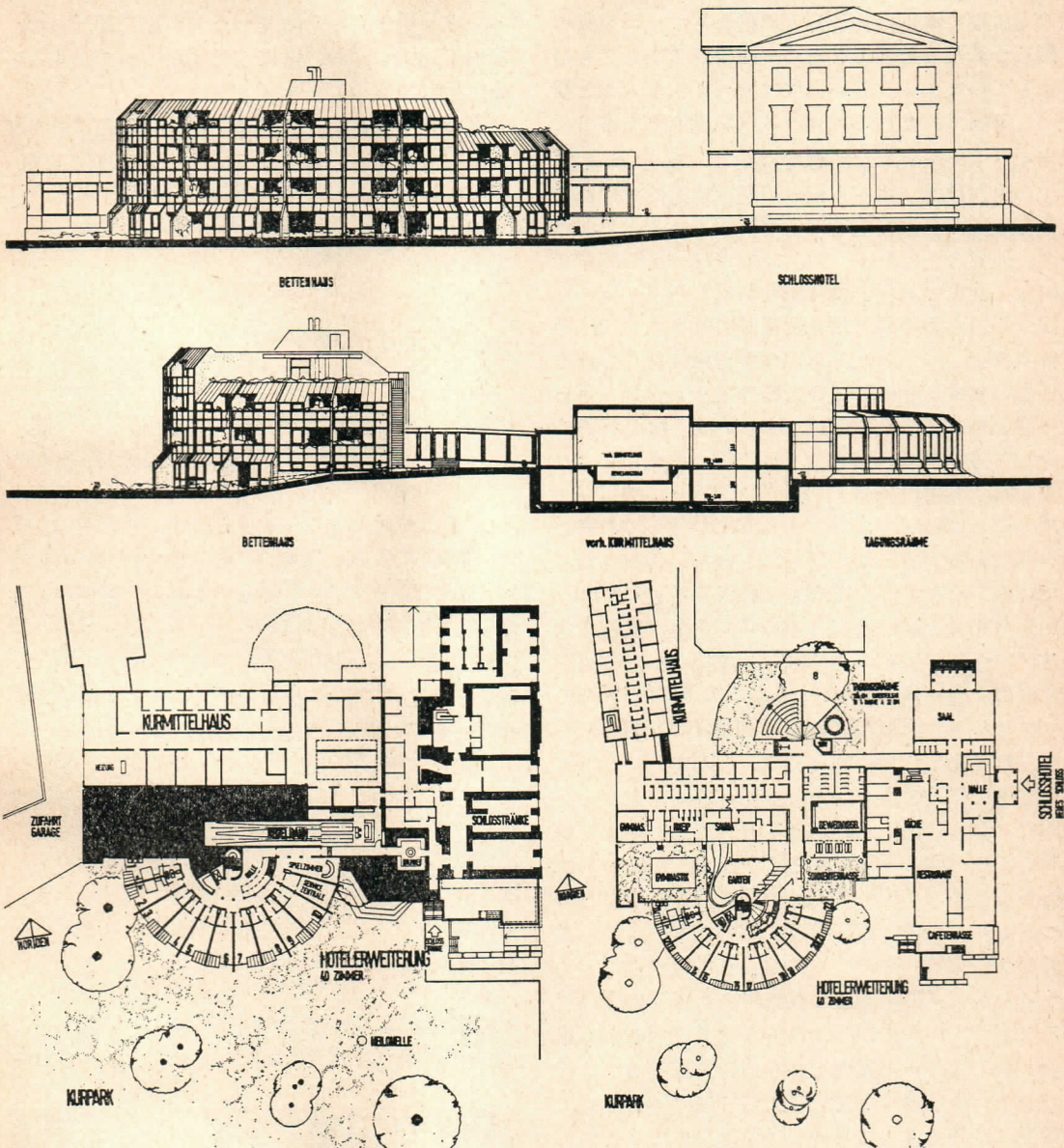
先日私の恩師の十代田教授より大学後援会誌に「海外で活躍するOBたち」のテーマを取り上げるので是非一報をとの事でした。私の様な者が該当するか、はなはだ疑問ですが、若い学生諸君に何かご参考になれば幸いと思い筆をとりました。

現在私はドイツの片田舎のアロルセンの所長夫妻共々17名の小設計事務所で働いております。アロルセンの町は人口1万5千人でカッセルより西へ50kmに位置し、昔は城下町として栄え、1932年までバルデック郡の諸侯がこの地にて政治を執っていました。そんな小さな町には似合わない立派なお城があります。夏はルール地帯より多勢の保養客が訪れますが、町並は後期バロック様相を呈し、伝統的町並保護に指定され、回りを囲む森と調和して静かな独特の雰囲気を出しています。こんな小さな町でもギムナジウム、実業学校、特殊学校、市民会館は勿論、クラブ活動の一般市民の施設として、サッカー場、屋内・屋外水泳場、乗馬、テニス、射撃、水上スポーツ…等が整い安い会費で誰でも会員になれば、市民のコミュニケーションの場を提供しております。事務所の仕事の内容は知れたもので、住宅、商店、古い建物の改造、近隣の村の教会の新增築、村役場、キャンプ場等の比較的小規模の建築物の設計管理です。大規模の事務所、学校等は30km離れた隣のコールバッハや、50kmのカッセルにあり、同市の設計事務所と争わねばならず、仕事を受注するのが大変です。

私の仕事は友人の所長夫妻が施主と打合せ、殆んど基本設計をしますので、それを実施設計に移

す仕事、即ちエンジニアの役をしています。若所長とはカッセル事務所時代の仕事仲間、当時共に屋内水泳場、学校を手掛けました。アロルセンにきた経緯は所長の奥さんの父親が此の地に事務所を開業していましたのを、老齢なのを機会に娘夫婦が後継になって、其の時行動を伴にしてアロルセンに移りました。仕事は時々、前事務所と比べ物足りなく成りますが、小規模でも質の良い建物をお互いに努力しています。勿論、時間が許せば住宅等の構造計算も致しますがドイツのデザイン規格は厳しく住宅でも30~40枚の計算書が普通です。呆れてしまいます。顧みればドイツ滞在は約10年余に成ります。事実私の場合は多くの企業派遣、留学生フンボルト等の奨学金で渡欧された優秀な方々と違い、全く見知らぬ地において精神的、経済的にも独立していかなければならず、全てが冒険的で厳しい試練でした。

しかし自分が好んで選んだ道ですので意地としても挫折する事が出来ず日々、自己との戦いの連続でした。特に私の拙ない独語での役人との労働許可、滞在許可の交渉は熾烈を極めました。こんな緊迫した内にも喜ばしい事にヨーロッパの地で恩師の十代田教授、武藤教授、難波教授、早大の松井教授にお会い出来ました事は感激でした。文面が限られていますので、ドイツの一般市民の生活を大略いたしますと、ドイツの生活水準は高く日本はこのままでは仲々追いつけません。原因は社会構造の相違に依りますが、一例をあげますと新宅地造成の管理は全て市町村が実施し、日本の様に個人の不動産屋はタッチ出来ません。一個



人の権利より多くの市民の権利を重要とし、ゴネ得は絶対に許されないからです。故に一般市民は日本と比べ格安の値段で広い宅地を購入する事が出来ますので余分の資金を建物に投資可能であって立派な家が建られ、家庭は憩いの場所になっています。平均的住宅として家族構成3～4人を取り上げますと土地約700㎡、建坪1階120～130㎡、

総地下、屋根裏が利用出来ますので住むに必要な空間の外に客室、ホビー室、ホームバー、工作室洗濯室、食料貯蔵室(常時半年位(の食物貯蔵)セントラルヒーティング室、油庫(平均、5000リットル)を備えているのが普通です。実際、今後は省エネルギーの時代ですので、小規模で効率の良い住宅が要求されると思います。現在のドイツ経済

は過渡期で輸出の伸び悩みに拘わらず、軍事費は国家予算の6分の1を占め東西接点の厳しさを暗示しています。又若い世代は50~60代の人々と比べ、ひ弱で不勤勉でエゴイストが目立ちますのでドイツも将来大きな問題を抱えていると云えます。東西政治、エネルギー問題、後進国対策は工業先進国の日本も全くドイツ同様であると思います。何故ならば今後の政治、経済は一国の問題ではなく全世界の視野で考慮せねばならず、全ての国々が何らかの形で相互関係が有りますので、今後益々全人的な考え方を持つ事を余儀なくされると思います。最後に私の大好きなロングフェローの詩を書きます。この詩は悲しい時、淋しい時、そして劣等感にひたる時、常に慰め励ましてくれました。人生の詩篇・ロングフェロー、手島郁郎訳、悲しげな詩篇にて、『人生はた一つの虚しい夢である』と。なぜなら、眠っている魂は死んでいる、そして、物事は思われている通りではないからだ。人生は現実である！ 人生は熱誠である！ そして墓場はそのゴールではない。「汝塵なれば、塵に帰る」とは、魂について言われたのではなかった。享楽にあらず、悲哀にもあらず、我らの定められた目的と道は、行動することだ。明ごとに、今日より一そう進んだ我々を見出すために。芸術は長く、時は疾く去り行く、そして我らの心臓は強く勇ましくとも、なおも、おおわれた鈍き太鼓のごとく墓場への葬送行進曲を打ちつつある。この世の広い戦場においても、人生の露営においても、啞のように追われる家畜のごとくあるなかれ！ 闘争場裡の英雄であれ！ 「未来に頼るなかれ、いかに愉しくあっても！ 死んだ「過去」をして、その死者を葬しめよ！ 行動せよ、行動せよ、生ける「現在」に！ 内には心(ハート)、頭上には神！ 偉大な人々の生涯はすべて我らに思いを起させる、我らはその人生を崇高ならしめうることを、そして去り逝くとも、我らのあとに時の砂上に足跡を残し得ることを一足跡—それは多分、人生の厳かな大海原を航行している他の人が、一人の孤独な難破した兄弟が、見ては、再び心(勇気)を取り戻すような一。されば、立上がつて行動しようではないか！ いかなる運動にも、

ハート(勇気)をもって。なおも成し遂げつつ、なおも追求しつつ、学ぼうではないか！ 働くことを、そして待つことを！

私の住所を書いて置きます。渡独の際はお気軽にお訪ね下さい。何かのお役に立てば幸いです。

MASAMI TANAKA 3548, AROlsen,
Rothweilstr. 14. West-Germany
Tel (05691) 2847

* * *

アメリカ便り

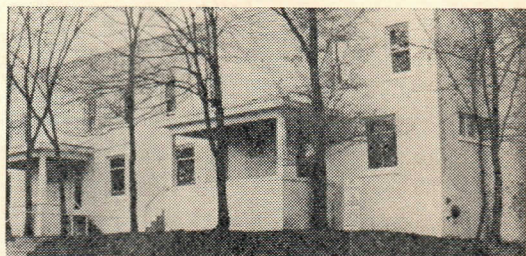
井 川 潤

(1977年度 大学院博士課程卒)

皆さんお元気のことと存じます。10月半ばから今週の間に引越し、ビザの切り換え等、いろいろとつづき原稿が遅れて誠に申し訳ありません。この2、3日は仕事で徹夜がつづき、今日はやっと休日をもらい、これを書く時間ができました。早いもので荻原研究室の皆さんがアメリカ建築視察団として来られてから1年以上、又、私がミノル・ヤマサキ事務所からグナー・パーカーツ事務所に移ってから、5ヶ月が過ぎました。

パーカーツの事務所は、ヤマサキ事務所と違い建築関係のスタッフは10人程で、小じんまりとし設計をしている建築も学校、教会、図書館、美術館といったコミュニティ施設が主で、私自身が興味を持っているビルディング・タイプです。

最近オープンしたミシガン大学(アナーバー)の法律学部新図書館は、地下建築で、隣接の旧図書館の増築として設計されたものです。スライド



パーカーツ設計事務所の外観

を送りますので、機会があったら見て下さい。

先日シカゴで出版している『インランド・アーキテクト』という雑誌で、サーリネン（エーロ）が紹介されており、彼の事務所で働いていた人々を中心に編集されていました。バーカーツもその中の一人ですが、ローチ、ディンケルー、ヴェンチュリー、ペリ、ラムスデンといったお歴々は現在のアメリカ建築界の第一線で活躍している人々で、サーリネンの人となりを紹介するに十分な読み物でした。サーリネンでまず第一に思い出すのは、克蘭ブルック・アカデミー・オブ・アーツ（週末ののどかな一日を過ごすに絶好の場）です。この学校はエーロの父エリエルの創設したアート・スクールですが、サーリネンは父の後を継ぎ、上記の人々を育てあげたわけですね。彼はサーリネン・ファミリーがミシガンからハムデン（コネチカット州）のマンション（現在のローチ・ディンケルー事務所）へ移る途中、ミシガン大学病院で脳手術をうけ、ファミリーがマンションに着いた時待っていたのは、エーロの死の報告だったそうです。その後の事務所は、ローチとディンケルーに任せられ、現在のローチ・ディンケルー事務所となっています。ディンケルーは、私がミシガン大学時代、グナーのデザインクラスをとっている時に、大学へ来て事務所の新作を紹介してくれましたが、その彼は、この夏亡くなり、ローチも何度かの心臓発作で、かなり疲れているようです。一年程前、私が就職先を捜し始めた時、インタビューでローチに合う機会を得ましたが、その時の彼は、日本の建築雑誌の写真で見ていた人物とは別人ではないかと思うほど、老いた姿にみえました。

バーカーツは、エーロの事務所を去り、ヤマサキ事務所での5年間のチーフ・デザイナーの後、独立し現在に至っています。事務所は、デトロイト郊外のバーミングハムという街の中心から少し離れた住宅地の中にあります。サーリネン事務所の影響ででしょうか、スケマティック・デザインの段階でのラージスケール（ $1/16$, $1/32$ など）のスタディモデルは目を引くものがあります。反面、模型に頼り過ぎているというきらいもありますが…。

アメリカ建築界全体の流れともとれますが、事務所の50%~60%は増・改築の仕事で、古い建物を利用し、共存させながら新しいものをつくるといった具合で、これからもこの傾向は続くと思います。又、「古い」と関連して言えることは、日本でもA+U誌で紹介された『ポスト・モダニズムの建築言語』（チャールズ・ジェンクス著）のように、ある建築家達は、古いもの、ヴァナキュラーなものへと傾倒し、さまざまなメタフォーを駆使し、何かを語ろうとしているようです。フィリップ・ジョンソンのテキサスに建つ新しい超高層ビルディング計画案は、ブルーノ・タウトのアルペン建築を思わせるものです。「古いものへの傾倒」と「建物のスキン（材料）」への執着とが相まって、さまざまな建築家が、自分を納得させながら、新しい建物を紹介しているといった具合で、雑誌を見ていて、ふと彫刻か絵を見ている錯覚に落ちいたりすることもあります。一方、これは友人から聞いた話ですが、S・O・M（シカゴ）では、シアーズタワー（現在世界一高いオフィスビルディング）より50階以上も高い、フランク・ロイド・ライトの計画案のマイルハイ・スカイスクレーパーを思わせるような建物を計画中でそうです。

ここミシガンには、又、寒い冬がやってきました。体感温度で-30℃以上にもなるので、少々疲れますが、元気でやっております。皆さんもお体に気を付けて下さい。

11月12日, 1981年, Birmingham, Michigan にて

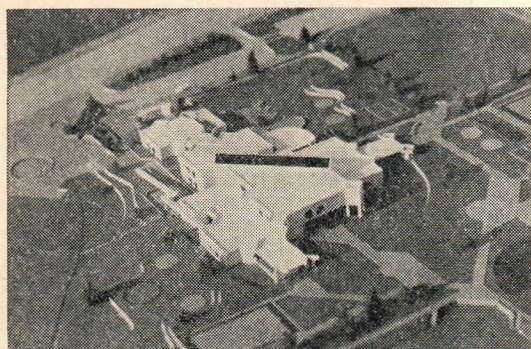
* * *

ロスアンジェルスから なつかしさをこめて

久野和作

(1970年度 大学院修士課程卒)

建築という世界にのめり込んでしまったのは、4年生になるため、山下司研究室の扉を叩いてしまってからのような気がする。そして、はや十年が過ぎ、サンタモニカの岸に立ち、この海を渡ると日本だなと考えることもある日々です。



UCLAで横文彦デザインスタジオ・小学校プロジェクト

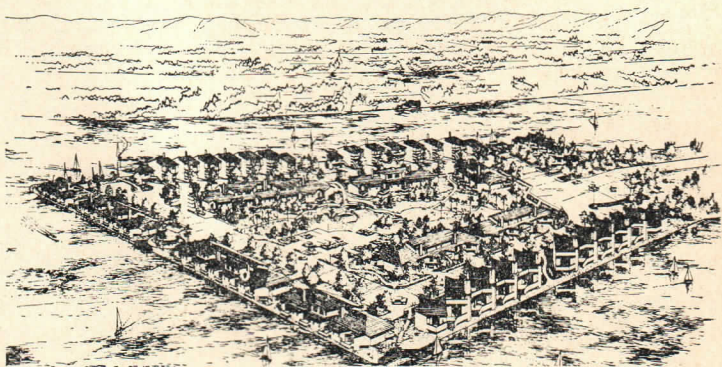
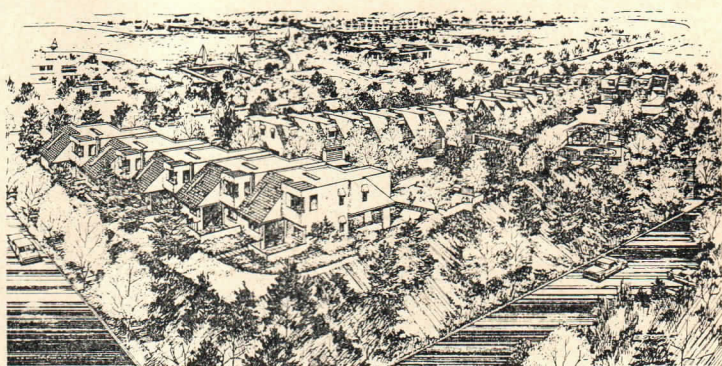
■渡 米

最終学年は、雑誌にでていた、競技設計まぐれ入賞にはじまり、ゼミ、卒論、卒業設計と、自分なりに燃焼した忘れがたい年でした。そしてそのまま大学院に入れていただき、6年間の十分な在席後は新宿の校窓をあとにし、創和設計の分室事務所、UA都市建築研究所へ入所。その所の所員に変わり種が多く、アメリカ帰りの人、留学中の人、社長の好意でまさに留学しようとしている人など、刺激が多く、アメリカ行きを、まじめに考えはじめたのはこの頃でした。そんな時、分室事務所の不自然さによる内部のゴタゴタ、大きな住宅の依頼を受けたり、英語の勉強をしたなど期が重なり退所、そして古巣の山下先生の御好意で原宿の事務所に厄介になり、阿部邸（近代建築誌1974年9月号掲載）の完成を待って、羽田の上空から、昂奮したおももちで夜景を眼下にしたのはいまでも鮮明に思い出されます。しかし奨学生の訳でもなく自費留学の富がある訳でもなく、多少の不安と、多大な楽観だけの渡米でした。

■UCLA

数週間の後、取りあえず食い扶をと、設計事務所さがしに歩きま

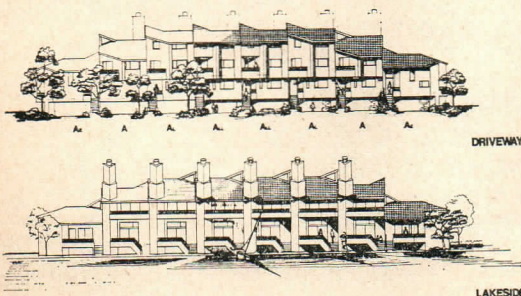
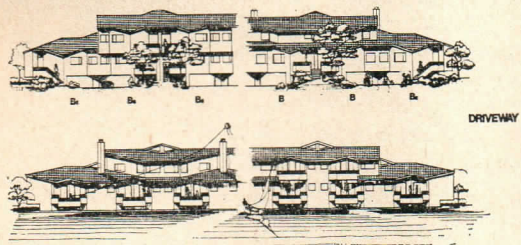
したが、オイルショックの直後で、不況のどん底にあり、門前払いもたびたびでただでもいいから使ってくださいと言っても、お前とコミュニケーションする暇はないと断られたりで、トボトボアパートに帰るのは楽しいものではありませんでした。それでも尚、翌朝にはカセットテープに向って、英語の練習の為、“THIS PROJECT IS……”と口ならしし、今日はウェストウッド地区重点目標と出掛けて行きます。そんな中、捨てる神あれば拾う神ありで、UCLAのキャンパス・ビバリーヒル、ベルエマの住宅の森を見下す、高層ビルの、とある設計事務所の椅子に座ることになりました。初めは約束通り無給、しかし出来ることが解ると払ってくれ、3ヶ月ごとに時間50セント（月給にして約2万円）づつ昇給して行き、ドラフトマンとしての技術を学びながら、軍資金も出来、バイトとしても両立の可能性をみて、伊藤ていじ先生が渡米前にくれた、ハナムケの言葉君ならど



湖畔に建つ22世紀のコンドミニウム（鳥カン図）

こにでも受かるよという激励を信じて、UCLA にアプライしたところ、入学を許され、SCHOOL OF ARCHITECTURE で URBAN DESIGN IN ARCHITECTURE の MASTER をとることになりました。よく言われる様に、アメリカでは、大学名ではなく、教授陣に誰がいるかで、学生が集って来ます。ルイス・カーンの亡きあと、さほどの名門のない米国で、東部志向から、カルフォルニアの注目も手伝って、UCLA はチャールズ・ムーアを頭に、アメリカ建築のひとつの流れを作っている面々を揃え、さらに学生からアンケートをとり、世界の売れっ子建築家を、クォーター学期ごとに呼び、設計製図を教えさせます。槇文彦など多忙な人は半分の5週間で密度の濃い授業をされています。

授業に出席して、日本で受けたそれとの違いに加えて、ああ、あんな方法、こんな力の養い方があるなど、様々なアイディアが湧いて来ます。自分の金を使って学校に来ている学生の熱心さにまじって、教授の真摯で、プロフェッショナルとしての徹底さには目を見張るものがあります。というのも、毎学期の終りに、教授がその科目について十分な知識があるか、UP TO DATE が(10年



湖に浮ぶ83世帯のコンドミニアム

前のノートを見てしゃべってはいないのかの意味) 授業の予習は十分か等々、こと細かく学生から勤務評価され、その結果、プロ野球の選手のように、契約のとれる人、トレードに出される人と苛酷な制度があります。又一方実社会で実績を上げている人を呼びもどし抜擢する柔軟性も備えています。

他に顕著な違いのひとつに、効果ある媒介を通じて説得力あるプレゼンテーションをする力を養う教育に重点をおいています。ある科目で、調査研究の結果を20分間の録音テープに音を、スライドで映像、全環境的覚方式によるプレゼンテーションさせられ、20分間の中に随分密度の濃い内容が入るのに驚き、充分勉強させられました。学校でのことは、他に、結果重点ではなく過程無視主義の教育であること等々、きりがありません。兎に角小生は最短時間で単位を取り、夏のグラウンドで頭に四角い帽子に房をつけ、身には黒いガウンを付けて、無事卒業いたしました。

■職 場

卒業を機会に、自分で養ってきたこと、考えていることを成就させるべく、一人で取扱い出来る規模の仕事の多い小事務所を選びました。そこではチーフデザイナーとして数十から数百世帯の集合住宅をいくつか手がけました。その規模になると、個々の住宅のデザインはもとより、プール等運動施設、洗濯場、クラブハウスなどと道路のサーキュレーションまで、都市計画的プランニング技術が要求されます。

現在は、数名で取扱う規模の仕事の多い、大事務所でシニア・デザイナーとして、コンベンション・センター、ホテル、オフィスビル、工場などをやって、技術的な意味で、建物の種類を多くし、キャリアに幅をつけることを目指しています。

おわりに、“今夜は新宿で集まろうか”と古い友人との語らいをもてない外国の地では、同胞からの便りがなによりです。この便りの反応なり、工学院大学の、日本の昨今でもなんでもお待ちしております。

あて先: WASAKU KUNO
HNTB 621 S. WESTMORELAND
AVE. LOS ANGELES, CA. 90005

都市の明治

—路上からの建築史—

著 者 初 田 享
発行所 株式会社 筑摩書房
定 価 1,800円



「都市の明治」—路上からの建築史が筑摩書房より1981年9月10日に、初田亨氏（建築69卒、現本学建築学科助手）が出版され、下記に示すが如く、各所から絶賛されましたので、御紹介致します。

推 薦 文

伊藤ていじ学長

和洋折衷といい、擬洋風といい、その表現はさまざまあるが、それらを支える思想はそれぞれ別のものだったのか、或いはひとつのものの表現の相違にすぎなかったのか。

もし明治の建築が、エリート建築デザイナーたちによって、純粋な洋風のみを目指していたとしたら、果たして今日みられるような、わが国の建築があるだろうかという疑問がある。

それを解く鍵のひとつとして、初田亨は棟梁による和洋混在の建築の根底を支えるものを、探り出そうとした。

■多方面で紹介

1. 洋風消化した民衆建築（朝日新聞 56.10.5）
1. 和洋折衷・建築の底流、近代化推進の大きな役割（北海新聞 56.10.6）
1. 和洋を建築に融合した棟梁たちは創造的だった（読売新聞 56.10.5）
1. ユニークな「文化史論」（東京新聞 56.10.5）
1. 建築にみる文化受容「和洋折衷」に光を当て（共同通信系新聞 56.10）
1. 木造漆喰塗建築の健康さ、はじめて市井の人びとの視座から—丸山 茂（図書新聞 56.10.31）
1. 大工職人を正面に東京を見直す（公明新聞 56.11.16）

1. 建築に親しむ本—馬場璋造（サンケイ新聞 56.11.26）
1. 現代日本建築のルーツ—若山滋氏と対談（日経産業新聞 56.11.24）
1. 週刊文春（'81.10.15）
1. 市井の人びとの視点から（科学朝日 '81.10 読売コーナー）
1. 明治時代の東京にだって、アングラーはいたはずなんだ（月刊アングル '81.10 今月の1冊）
1. 自然（'81.12 藤森照信評）
1. 都市、東京の近代化の過程を大工、職人の側から捉える（朝日ジャーナル '81.10.30 布野修司評）
1. 和洋折衷建築にみるバイタリティ（週刊建設ニュース '81.11/4 週 村瀬淳一郎評）
1. 本とひと—46（a t u '81.12）
1. 近代化の流れの中で生まれた建築を市井から見る（商業建築 '81.12）
1. 室内（'81.11）
1. 建築とまちづくり（'81.12 書評）
1. 市井の人々を主役した独自の視点。（日経アーキテクチャー '81.12.21 図書室 近江栄評）
1. アゴラー都市建築の命脈を生活者の意識の中に探る（ジャーナル 店舗と建築 '82.3 板倉文雄評）
1. 赤練瓦の明治の底からの問題提起（新建築、読書室、山口 広評）
1. 建築文化（'82.2 今月取上げた本）
1. 日刊建設新聞（56.10.26）

著者経歴

1947年 東京都葛飾区に生まれる
1965年 工学院大学第2部建築学科卒業
現在 工学院大学建築学科助手
主要論文 「海運橋三井組為替座御用所の建築について」、「駿決町（三井組）為替座御用所の建築について」、「明治初期の本船町魚納屋と「西洋造り」について」

学 園 の 近 況

学園教職員学生生徒数 昭和56年10月1日現在

教職員数

種 別 \ 部 門	法 人	大 学	高 校	専 門 学 校	合 計
教 育 職 員		245	52	24	321
一 般 職 員	70	131	10	6	217
合 計	70	376	62	30	538

学生生徒数

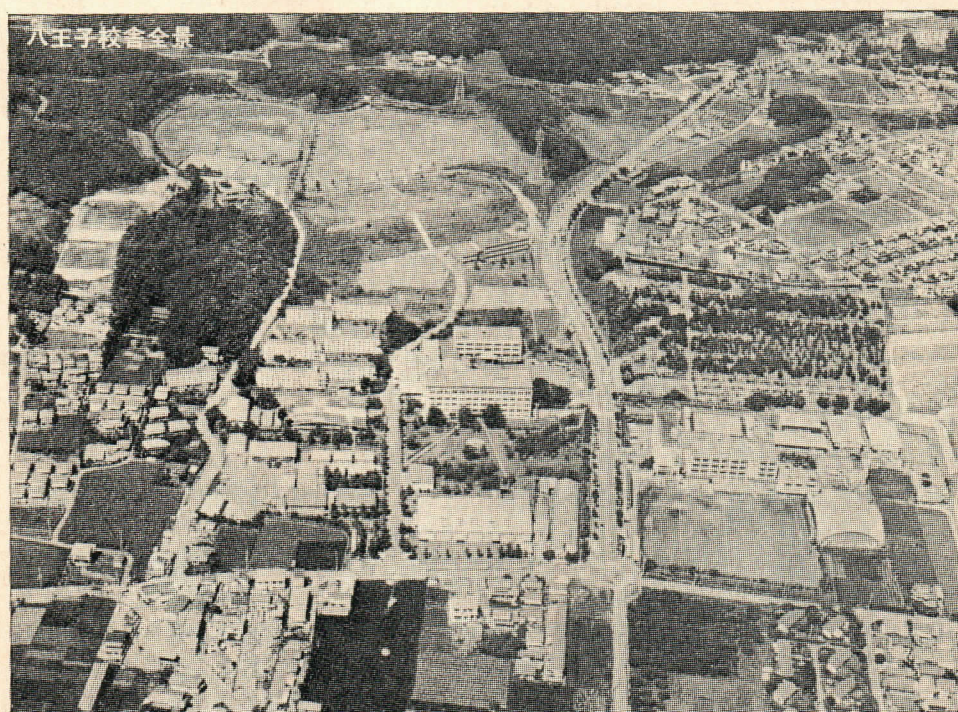
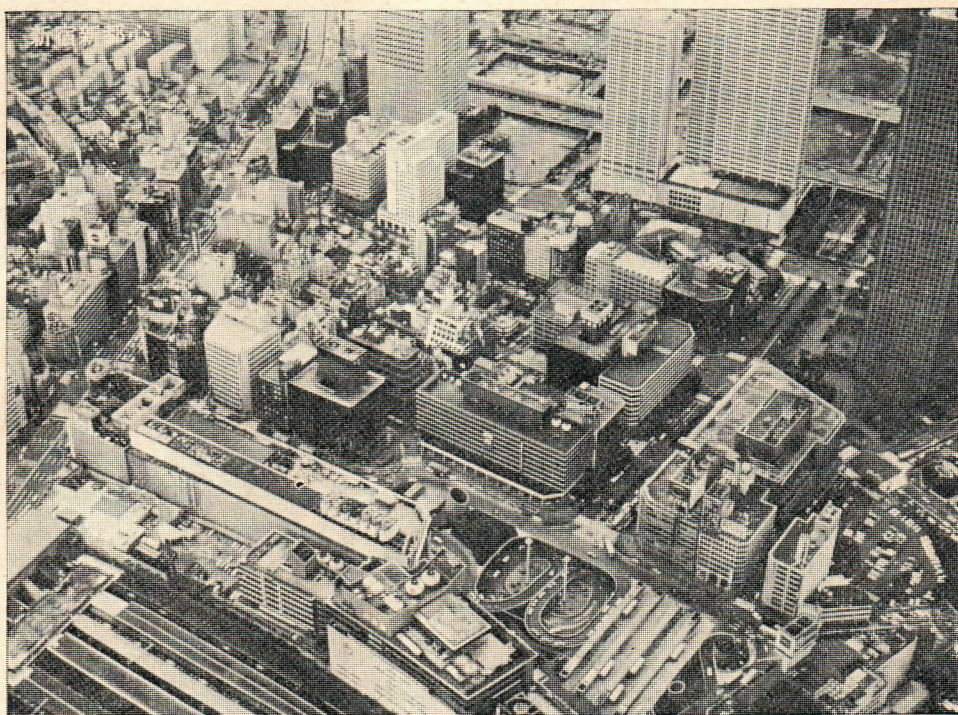
学科	学校別 部別	大 学						高 校	専 門 学 校				合 計
		大 学 院		専攻科	1 部	2 部	計		昼間部	夜間部	研究科	計	
		博士	修士										
機 械		1	9	1	994	329	1,334	142	129	73		202	1,678
生 産 機 械					233	18	251						251
工 業 化学		1	6		493	121	621	150		74		74	845
化 学 工 学					391	37	428						428
電 気		3	12		577	177	769	153		116		116	1,038
電 子					445	239	683						683
情 報					338		338						338
建 築		1	25		1,205	520	1,751	157	283	487	45	815	2,723
土 木									117	146		263	263
造 船										19		19	19
金 属										8		8	8
普 通								578					578
合 計		6	52	1	4,676	1,440	6,175	1,180	529	923	45	1,497	8,852

学校別・学科別卒業生数

(昭和56年3月)

学校名(期間)	学 科	計	*土 木	*機 械	*生 産 機 械	*電 気	*電 子	*建 築	*工 業 用 化 学	*化 学 工 学	*造 船	*金 属 ・ 冶 金	採 鉱 ・ 冶 金	採 鉱	内 燃 機 関	航 空	工 業 経 営	*普 通
工 手 学 校 (明22.7~昭3.2)		18,033	3,559	3,336		4,581		3,551	915		595	228	747	521				
工 学 院 (昭3.7~24.3)		11,163	1,339	2,791		2,059		1,860	844		668	11	641	13	401	536		
工 学 院 専 修 学 校 (昭25.3)		124	29	4		10		75	6									
工学院大学専修学校 (昭26.3~51.9)		10,422	1,469	2,087		1,244		3,920 ●235	706		437	322	2					
*工学院大学 専 門 学 校 (昭52.3~56.3)	夜間部 (52.3~56.3)	2,228	364	183		245		800 ●363	185		65	23						
	昼間部 (56.3)	128	49	38				41										
計		42,098	6,809	8,439		8,139		10,845	2,656		1,765	584	1,390	534	401	536		
工学院第一中学校 (昭23)		205																205
工 学 院 中 学 校 (昭24)		265																265
工学院大学中学校 (昭25~33)		509																509
工学院第一工業学校 (昭24)		112		47		41			24									
*工学院大学高等学校 (昭25~56)		11,265		2,509		1,618		1,628	1,083								138	4,289
計		12,356		2,556		1,659		1,628	1,107								138	5,268
工学院第二中学校 (昭23)		192																192
工学院第二工業学校 (昭25~26)		166		29		137												
工学院大学高等学校(夜) (昭26~42)		1,866	35	551		665		597	18									
計		2,224	35	580		802		597	18									192
工学院工業専門学校 (昭22~25)		278		137					141									
工学院大学短期大学部 (昭27~31)		507		117		201		133	56									
*工学院大学 工学部 (昭27~56)	第一部	22,386		4,680	1,905	3,643	2,496	5,465	3,252	945								
	第二部	9,333		2,565		2,566		2,941	1,261									
工学院大学専攻科 第一部 (昭34~39)		44		6		14		17	7									
*工学院大学専攻科 第二部 (昭34~56)		707		224		235		169	79									
*工学院大学 大学院 (昭41~56)	修 士	410		93		114		125	78									
	博 士	5				5												
計		33,670		7,822	1,905	6,778	2,496	8,850	4,874	945								
合 計		90,348	6,844	19,397	1,905	17,378	2,496	21,920	8,655	945	1,765	584	1,390	534	401	536	138	5,460

注：(1) 中学校は便宜上普通科に入れた。(2) ●印 建築科研究科。(3) *印 現在設置している学校および学科。



第16年度決算報告

自昭和56年5月1日
至昭和57年3月31日

予 算

決算（＊印は予算オーバー、▲印収入不足）

収 入 の 部		支 出 の 部		収 入 の 部		支 出 の 部	
1)会 費 準会員入会 金及び会費 2,200,000 正会員会費 100,000	2,300,000	1)会誌発刊費 2)各部会費 3)名簿発刊費 全同窓生 2,350,000 新同窓生 250,000	1,650,000 100,000 2,600,000	1)会 費 準会員入会 金及び会費 1,618,000 正会員会費 0	▲1,618,000	1)会誌発刊費 印刷費 919,600 編集経費 42,590	962,190
2)預金利息 普通預金 50,000 信託収益 1,420,000	1,470,000	4)本部運営会議 費 80,000 消耗品費 5,000 通信交通費 5,000 雑費 10,000	100,000	2)預金利息普 通預金 17,576 信託収益 1,322,529	▲1,340,105	2)各部会費 同窓会援助 122,560 有機物建築 の会 36,060	*158,620
3)雑収入 公告料 470,000 名簿代 500,000	970,000	5)事務費	500,000	3)雑収入 公告料 350,000 名簿代 0	▲350,000	3)名簿発刊費印 刷費 2,284,000 消耗品費 93,060	2,377,060
4)積立引き出 し金	3,030,000	6)準会員 援助金学内コ ンペ 100,000 学祭 80,000	180,000	4)積立引き出 し金 4,651,720	*4,651,720	4)本部運営費 会議費76,355 消耗品費 13,096 通信交通費 26,220	*115,671
		7)総会運営費 印刷費 500,000 送料 500,000 懇親会 100,000	1,100,000	5)事務費 アルバイト 921,435 交通費53,840		5)事務費 アルバイト 921,435 交通費53,840	*975,275
		8)校友会分担金 運営費分担 977,000 会報分担 463,000	1,440,000	6)準会員援助費 コンペ展祭 0		6)準会員援助費 コンペ展祭 0	0
		9)予備費	100,000	7)総合運営費 印刷費 125,000 送 料 1,523,320 懇親会50,000		7)総合運営費 印刷費 125,000 送 料 1,523,320 懇親会50,000	*1,697,320
		10)積立金組入	0	8)校友会分担金 分担金 1,041,634 会報 222,225 送料 123,730		8)校友会分担金 分担金 1,041,634 会報 222,225 送料 123,730	1,387,589
				9)予備費 U I A援助金 100,000 横田教授銭別 20,000 振込手数料 16,100		9)予備費 U I A援助金 100,000 横田教授銭別 20,000 振込手数料 16,100	*136,100
				10)積立組入れ金		10)積立組入れ金	150,000
	7,770,000		7,770,000		7,959,825		*7,959,825

積立金内訳

積 立 金		内 訳	
1)前年度ま での積立金	24,570,115	1)三井信託銀行 貸付信託 19,400,000	19,494,551
2)第16年度積 立金	150,000	2)収益第一勧業 銀行 普通 376,462 当座 5,092	381,554
3)積立引き出 し	▲4,651,720	3)郵便振替口座	42,290
		4)現 金	150,000
	20,068,395		20,068,395

会計監査報告
昭和57年4月22日
帳簿・領収証監査の結果記載が正確で
ある事を認める。
建築学科同窓会監査委員
福 田 丈 夫 印
宮 野 昌 弘 印

第 17 年 度 予 算 案

自 昭和57年 4 月 1 日
至 昭和58年 3 月31日

収 入 の 部	1) 会 費 収 入		2, 200, 000円
	準会員からの会費 正会員からの会費	2, 100, 000円 100, 000	
	2) 預 金 利 息		1, 400, 000
	普 通 預 金 貸 付 信 託	50, 000 1, 350, 000	
	3) 雑 収 入		300, 000
	広 告 代 名 簿 代 予 約	200, 000 100, 000	
	4) 積 立 金 引 出		3, 850, 000
	収 入 合 計		7, 750, 000

支 出 の 部	1) 会 誌 発 刊 費		1, 200, 000
	2) 各 部 会 費		300, 000
	3) 名 簿 発 刊 費		2, 300, 000
	全 同 窓 生 名 簿 新 同 窓 生 名 簿	2, 000, 000 300, 000	
	4) 本 部 運 営 費		150, 000
	会 議 費 消 耗 品 費 通 信 交 通 費 雑 費	100, 000 5, 000 15, 000 30, 000	
	5) 事 務 費	100, 000	100, 000
	6) 準 会 員 援 助 金		100, 000
	学 内 コ ン ペ 学 学 王 子 祭 八	100, 000	
	7) 総 会 運 営 費		1, 900, 000
	印 刷 費 送 料 会 懇 親 会	200, 000 1, 600, 000 100, 000	
	8) 校 友 会 分 担 金		1, 600, 000
	運 営 費 分 担 会 報 分 担 そ の 他	1, 300, 000 300, 000	
	9) 予 備 費		100, 000
	10) 積 立 金 組 入		0
	支 出 合 計		7, 750, 000

建設大臣免許(1)第2986号

日本エネルギー株式会社

代表取締役 富所 良二 (G化1)昭和27年卒



営業案内



☆東京海上火災保険(株)の代理店
☆都心通勤圏の宅地開発分譲及建設,
土木設計施工
☆環境公害処理の設計施工

☆太陽エネルギー給湯器等省エネ機器の
開発と設計施工
☆水素ガス等新エネルギー開発及設計施工
☆省エネ及財産保全と利殖の無料相談室

本 社 〒100東京都千代田区丸ノ内2-4-1丸ビル663 電話東京03-201-3961(代表)
神奈川支店 〒251神奈川県藤沢市鵜沼奥田2039-93奥田ビル 電話藤沢0466-27-1571(代)

営業品目

鉱物資源開発及生産, 自動車部品輸出入,
不動産業, 映画配給業

榊原興産株式会社

代表取締役社長 足立 剛一 (E I化1)

本社 東京都港区北青山3丁目11番14号
東信青山ビル3階
☎107 電話 (03) 406-8 5 7 1 (代)

日通プロパン・ガス器具販売・配管工事一式……電話相談良し（校友に限る）
実用新案 第1080573……LPガスボンベ取換日計算器
第1149309……番号カード取出装置

株式会社 昭 光 製 作 所

LPガス主任技術者 小野塚 政 男（B機93）

☎174 東京都板橋区常盤台4-20-2 電話 03-933-4825
技術関係に使用する、LPガスは特に品質を選んで下さい。

岡 崎 建 設 株 式 会 社

取締役社長 相 野 谷 重 信（建99回卒・工学院大学
後援会会長）

☎150 東京都渋谷区桜丘町3-3（第二岡崎ビル） 電話 東京（03）463-2320（代）

株式会社

西武百貨店

営 業 品 目

内装工事、家具工事、お中元、お歳暮、
図書館家具、博物館用特殊内装材
（ノンホルマ、ミュージライト）

〈外販部商事3部建装課 愛川〉

☎171 東京都豊島区南池袋1-28-1
電話 東京（03）983-5113

カラーを翼に飛ぶインテリア

キロニー

キロニーは信頼のブランド

カーテン・カーペット・マット・のれん・クッション・アコーディオンカーテン・
ブライト・壁紙・クッションフロア・人工芝・パンチ・その他インテリア製品



兼坂商事株式会社

本 社 〒105 東京都港区新橋2-5-5
☎03-503-2411（代）
インテリアイン 〒105 東京都港区新橋2-5-4
☎03-503-2414（代）
建 装 部 ☎03-503-7345（代）担当竹内
大 阪 営 業 所 ☎06-380-2040